

松本市文化財調査報告 No.102

HARIZUKA

# 松本市針塚遺跡Ⅱ

— 緊急発掘調査報告書 —

1993・3

松本市教育委員会

HARIZUKA

# 松本市針塚遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

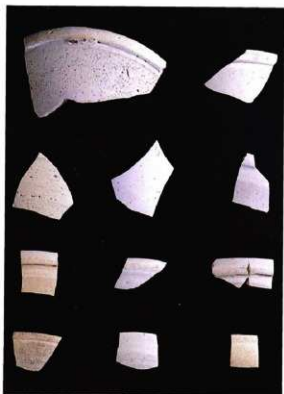
松本市教育委員会



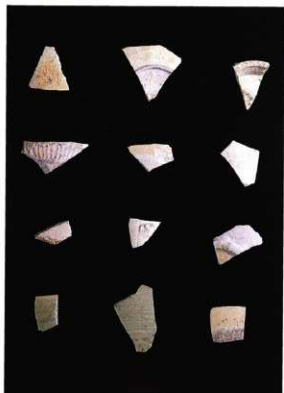
第9号住居址. 石組カマド(▲上から, ▶下面から)

11世紀後半～12世紀前半頃の住居址。

カマドは住居のコーナーに造られる。本址では  
壁と軸石からなる空間に河原石を控え積みして構  
築されている。



輸入磁器 (白磁)



輸入磁器 (白磁・青磁)

## 序

松本市街地の東方に位置する里山辺地区は、多くの埋蔵文化財が残されている地域として以前から知られております。この度、山辺地区県営ほ場整備事業が針塚遺跡を含む一帯で実施されることになりました。そこで、松本市は長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施して遺跡の記録保存を行うことになりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成3年12月から平成4年2月にかけて行われました。厳寒期の発掘作業は降雪や凍結に悩まされましたが、参加者の皆さまの並々ならぬご尽力により無事遂行することができました。その結果、奈良時代から平安時代にかけての住居址19軒、建物址3棟など数多くの遺構と、該期の遺物を多数発見することができました。そして、これらの成果は市教育委員会の委託を受けた松本市教育文化振興財団によってまとめられ、この度本書が刊行されることになりました。今後、本書が郷土の歴史を解明していく史料として有効に活用されることを願っております。

なお、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存ということで遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発と、それによって失われていく歴史財産という矛盾のなかで、文化財の保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、このうえなく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆さま、また調査にあたりまして多大なご理解を頂いた薄川土地改良区、地元関係者の皆さまに心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

## 例 言

1. 本書は平成3年12月4日から平成4年2月7日にかけて行われた、松本市大字里山辺3080・3100番地一帯に所在する針塚遺跡<sup>カサヅカ</sup>の緊急発掘調査報告書である。針塚遺跡では1982年3月に範囲・遺構確認調査(未報告)が実施されているので、今回の調査は第2次調査になるものである。
2. 本調査は平成3年度興宮ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。
4. 本書の執筆は、第1章：事務局、第3章第3節2.(1)：竹内靖長、その他の項目を関沢 聡が担当した。
5. 本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。  
遺物復原：五十嵐周子・内田和子・村松恵美子  
遺物実測：和田和哉・久根下三枝子・関沢 聡  
遺物トレース：開嶋八重子・直井由加理・久根下三枝子  
遺構図整理・一覧表作成：石合英子  
遺構図トレース：開嶋八重子  
図版作成：林 和子  
写真撮影：宮嶋洋一(遺物)、関沢 聡(遺構)
6. 本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。  
竪穴式住居址→住、掘立柱建物址→建、溝址→溝、土坑→土、ピット→P  
使用例 第4号住居址→4住、第3号建物址→3建、第2号溝址→2溝、第1号土坑→1土  
ピット5→P5(住居址に伴うピットの場合はP<sub>5</sub>)
7. 本書の中で使用した遺構の細部表現は次の通りである。



焼土・カマド内被熱部



炭化物

8. 本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

# 目 次

序

例言

目次

## 第1章 調査経過

第1節 文書記録	3
第2節 調査体制	3

## 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5

## 第3章 調査結果

第1節 調査の概要	7
-----------	---

### 第2節 遺構

1. 住居址	8	2. 建物址	13
3. 溝址	14	4. 土坑・ピット	14

### 第3節 遺物

#### 1. 縄文・弥生時代の遺物

(1) 土器	16	(2) 石器	16
--------	----	--------	----

#### 2. 古代以降の遺物

(1) 土器・陶器	17	(2) 土製品	21
(3) 金属製品	21	(4) 石器	22

第4章 調査のまとめ	24
------------	----

## 目 次

第1図 遺跡の位置……………28	第14図 第1・2・3号建物址……………41
第2図 調査範囲……………29	第15図 第1・2号溝址……………42
第3図 周辺遺跡……………30	第16図 土坑 (1)……………43
第4図 全体図……………31	第17図 土坑 (2)・ピット……………44
第5図 第1号住居址……………32	第18図 土器 (1)……………45
第6図 第2・3・5号住居址……………33	第19図 土器 (2)……………46
第7図 第4・6・7号住居址……………34	第20図 土器 (3)……………47
第8図 第8号住居址……………35	第21図 土器 (4)……………48
第9図 第9・10号住居址……………36	第22図 土器 (5)……………49
第10図 第11・14号住居址……………37	第23図 土器 (6)……………50
第11図 第12・13号住居址……………38	第24図 土製品・金属製品……………51
第12図 第15・16・18号住居址……………39	第25図 石器 (1)……………52
第13図 第17・19号住居址……………40	第26図 石器 (2)……………53

### 挿 図 目 次

挿図 基本土層……………4
---------------

### 表 目 次

第1表 土坑・ピット一覧表……………15
第2表 住居址一覧表……………26
第3表 建物址一覧表……………27

# 第1章 調査経過

## 第1節 文書記録

- 平成2年9月12日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月15日 平成3年度補助事業計画書提出。
- 平成3年5月1日 平成3年度県営ほ場整備事業山辺地区針塚遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 9月19日 平成4年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月2日 平成4年度補助事業計画書提出。
- 10月9日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 10月15日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 11月1日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 11月11日 針塚遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 11月20日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 12月27日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 平成4年1月23日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 2月28日 針塚遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 3月27日 針塚遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 5月27日 平成4年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月9日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 7月17日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 9月7日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月24日 平成4年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

## 第2節 調査体制

### 【平成3年度】(発掘調査)

調査団長：松村好雄（教育長） 調査担当者：関沢 聡、和田正雄（社会教育課）  
発掘参加者：青木雅志、赤羽包子、赤羽紀子、石合孝光、因幡美津子、大淵一男、大山長一、大輪昌門、岡部登喜子、上條きみ子、奥 喜義、佐々木俊行、佐々木保二、瀬川長広、武田睦恵、田村かつよ、鶴川 登、中島新嗣、中村 嵩、中村頼三、西村 好、横詰喜彦、平林 薫、藤井源吾、藤井道明、牧 久雄、三沢元太郎、矢崎寛子  
事務局：荒井 寛（社会教育課長）、田口 勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、関沢 聡（主事）、木下 守（主事）、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸生彦

### 【平成4年度】(報告書作成)

教育委員会事務局：島村昌代（社会教育課長）、田口 勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）  
（財）松本市教育文化振興財団：深澤 豊（事務局長）、牟禮 弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）  
松本市立考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢 聡（主任）、久保田 剛（主事）、荒井由美、藤原美智子



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 位置と地形 (第1・2図)

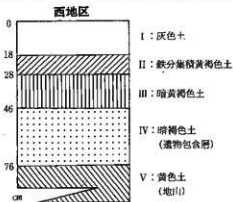
針塚遺跡は松本市大字里山辺に位置する。里山辺地区は松本市の東部に位置し、地形的には東山山麓と薄川扇状地からなる。薄川は扉畔方面から流れだして、松本市街地へ向かって流路は西下する。里山辺地区はこの薄川の中流域周辺にあっている。この地区の産業は、美ヶ原温泉を抱える観光産業と農業が中心である。農業は、林檎・葡萄の果樹栽培と水稻栽培が中心である。後者については、ほ場整備事業が進められており、今回の調査の事業原因でもある。また、最近では土地区画整理事業も始まり、里山辺地区は変貌しつつあるといえよう。

今回の調査地は、金華橋と兎川寺を結ぶ県道兎川寺・鎌田線沿いの金井医院の西側に設定した。県道の北側は兎川寺の集落、東側は薄町の集落が広がっている。現地は海拔高633.48m～635.39mの水田地帯で、東(高)－西(低)の緩斜面である。南側550mには薄川が流れている。立地的には薄川右(北)岸に展開する扇状地の扇尖部である。

#### 2. 基本土層

調査区は2地区を設定したが、隣接しているため両地区とも土層の堆積状況は同じである。挿印の基本土層は西地区の東南隅で観察したものである。全体的に各層は安定した堆積状況を呈していた。各層の概要は以下のとおりである。

I層は灰色土で、水田耕作土である。II層は鉄分の集積が認められる黄褐色土で、基本的にはIII層と同質のものである。III層は暗黄褐色土である。II・III層とも若干の小礫を混じえている。IV層は暗褐色土で、炭化物・土器を混入していることから、遺物包含層と考えられる。色調が暗色を呈するのは植物の腐植によるもので、旧地表に近い層と考えられる。なお、西地区の南壁では、III層とIV層の間に、暗灰色砂礫層が認められた。これは河川の氾濫(おそらくは薄川)が原因で生じたものと推定される。V層は黄色土で、考古学でいうところの地山である。この土層上面が遺構検出面になる。V層は礫が混じる部分と混じえない部分が認められた。遺構検出面は西へ行くほど深くなり、東地区の東西間約45mで1m近い高低差があった。これはIII層が厚さを増すため、I・II・IV層の厚さには特に変化は認められなかった。



挿印 基本土層

## 第2節 歴史的環境

針塚遺跡が所在する里山辺地区には多くの埋蔵文化財が分布している。最近では、開発に伴う発掘調査によって、いくつかの遺跡でその内容・性格が明らかにされている。本節では過去の発掘調査の成果をもとに、薄川中流域の集落遺跡と古墳について時代毎に概観するにとどめる（第3図）。なお、遺跡名に続く（ ）は集落の時期と住居址軒数である。

【旧石器時代】 中山丘陵の北側斜面で木葉形尖頭器と有舌尖頭器が採集されているが、薄川流域では該期の遺物は出土していない。

【縄文時代】 薄川両岸の山麓緩斜面～扇状地部分にかけて分布している。

左岸－林山腰遺跡（中期初頭～中葉3・後期敷石住居址1）がある。南方遺跡（早期～晩期）・千鹿頭北遺跡（中期）・神田遺跡（晩期）の発掘調査でも少量ではあるが該期の遺物が出土している。右岸－石上遺跡（前期末～中期初頭3）、鎌田遺跡（同1）、堀の内遺跡（中期初頭6）がある。上金井遺跡では中期の遺物のほかに、後・晩期に属する独鈷石が採集されている。

【弥生時代】 薄川の中・下流域の河岸段丘上および扇状地部分に分布しているが、右岸に多い。左岸－千鹿頭北遺跡（中・後期）、神田遺跡（中期）では遺構は認められなかったものの、検出面等から土器・石器が出土している。また、筑摩・神田地区（筑摩神社付近・松本工業高校敷地・富士電気工場敷地）で中・後期の遺物が採集されていることから、該期の集落は存在すると考えられるが、遺跡の実態は不明である。

右岸－針塚遺跡では当地域に弥生文化が波及した頃の、前期末の再葬墓が見つかっている。集落では泉町遺跡（中期後半38・後期末4）、鎌田遺跡（後期後半2）、堀の内遺跡（後期10）がある。なかでも泉町遺跡は当地方を代表する該期の集落遺跡として知られている。このほかに、本屋敷遺跡（中期）・宮北遺跡（後期）から該期の土器が出土している。

【古墳時代】 集落遺跡と古墳にわけて記述する。

●集落遺跡 弥生時代と同様の遺跡立地であるが、遺跡数は増大する。

左岸－千鹿頭北遺跡では前期の住居址7軒、後期の住居址40軒と建物址6棟が見つかっている。調査地周辺では中期の遺物が出土しているので、古墳時代を通して継続した集落の可能性はある。この他に、筑摩・神田地区から後期の遺物が採集されている。

右岸－堀の内遺跡（前期17・中期4・後期4）、鎌田遺跡（中期2）、泉町遺跡（中期末～後期初頭4）がある。なお、堀の内遺跡からは前期と推定される方形周溝墓が1基見つかっている。下原遺跡では山辺中学校敷地内の調査（1984～1986）で後期の住居址6軒と建物址1棟が確認されていたが、1992年の調査でさらに該期の住居址13軒と建物址11棟が見つかっている。

●古墳 薄川の西岸縁辺部と、山麓部の2ヶ所に分布が集中する。

左岸－薄川縁辺部では巾上古墳と南方古墳がある。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳である。特

に、南方古墳からは金銅装の主頭太刀、銅碗・承盤、鉄製壺蓋等の特殊な副葬品が出土し注目されている。山麓部では御符古墳があり、直刀・剣が出土していることから中期後半～後期初頭に築造されたと考えられる。

右岸―薄川縁辺部では、薄町～荒町にかけて分布する積石塚古墳群がある。このうち針塚古墳は5世紀後半に築造されたもので、竪穴式石槨には内向八花文鏡（船載鏡）が副葬されていた。大塚古墳・古宮古墳は出土物から後期古墳と考えられる。また、隣接する石上遺跡では後期古墳の周溝部分が検出されている。山麓部では山辺谷の沢筋毎に数基単位で後期古墳が分布している。いずれも斜面に立地した横穴式石室をもつ小規模墳である。このうち丸山古墳は1991年に発掘調査されて、6世紀の積石塚古墳であることが確認されている。

【奈良・平安時代】 薄川中流域の両岸で、広範囲にわたって遺跡が分布している。

左岸―千鹿頭北遺跡（奈良10・平安7）、林山腰遺跡（平安2）、神田遺跡（奈良・平安10）がある。このほかに筑摩・神田地区周辺からも遺物が出土している。

右岸―堀の内遺跡（平安67）・薄町遺跡（平安10）、石上遺跡（平安33）、栗町遺跡（平安42）がある。また、推定信濃国府確認調査（1982～86年）によって惣社～大村にかけて11軒、下原遺跡で2軒の平安時代の住居址が調査されている。

【中・近世】 左岸では南方遺跡から平安時代末～中世（12～13世紀）の住居址5軒が見つかった。右岸では薄町遺跡の建物址、石上遺跡の火葬墓3基などがある。調査例が少ないため該期の様相はよくわかっていない。今後の調査に期待したい。

#### 里山辺地区およびその周辺の考古学関係文献

- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻 歴史上』1973
- 松本市教育委員会 『長野県立松本工業高等学校遺跡』 1979
- 松本市教育委員会 『あがた遺跡』 1981
- 松本市教育委員会 『長野県立松本工業高等学校遺跡』 1981
- 松本市教育委員会 『松本市惣社宮北遺跡』 1982
- 神澤昌二郎 『針塚遺跡』 長野県史刊行会 『長野県史 考古資料編 全1巻（3）』 1983
- 松本市教育委員会 『推定信濃国府―第一次調査報告書―』 1983
- 松本市教育委員会 『推定信濃国府―第二次調査報告書―』 1984
- 松本市教育委員会 『推定信濃国府―第三次調査報告書―』 1985
- 松本市教育委員会 『推定信濃国府―第四次調査報告書―』 1986
- 松本市教育委員会 『推定信濃国府―第五次調査報告書―』 1987
- 松本市教育委員会 『松本市下原・埋橋遺跡』 1987
- 松本市教育委員会 『松本市林山腰遺跡』 1988
- 松本市教育委員会 『松本市千鹿頭北遺跡』 1989
- 松本市教育委員会 『松本市神田遺跡』 1989
- 松本市教育委員会 『松本市大塚古墳 南方古墳 南方遺跡』 1990
- 松本市教育委員会 『松本市栗町遺跡』 1990
- 松本市教育委員会 『針塚古墳の発掘』 1991
- 松本市教育委員会 『薄町・石上・鎌田遺跡』 1991
- 松本市教育委員会 『藤井・山田・上金井』 1991
- 松本市教育委員会 『松本市堀の内遺跡』 1992

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の概要

今回の調査地は松本市大字里山辺3080・3100番地一带にあたる。県営ほ場整備事業の対象面積は約5haである。調査地は過去に河川の氾濫を受けにくかった最高所の水田に設定することにし、現地観察の結果から事業区の東端に設定した。なお、調査区は水田用水路と農道を挟んで、東西に設定している。調査面積は東地区が980㎡、西区が496㎡で、総面積1476㎡である。

調査にあたっては重機を使用して耕作土と基盤土の一部を除去している。また、任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査区内を1辺3mの方眼で区画設定して測量を行った。なお、遺構全体図(第4図)のN・S・E・Wは方位を表し、数字は基準点からの距離(m)を表している。

調査の概要は以下の通りである。

#### 遺 構

竪穴式住居址19軒、掘立柱建物址3棟、溝址2本、土坑18基、ピット125基

遺構の分布状況から、遺跡は調査区外に及ぶことが判明したが、遺跡の範囲を確認することはできなかった。竪穴式住居址は調査区外にかかるものが多く、住居の全容を確認できたのはわずかである。しかし、8・9・17住ではカマドの遺存状況が非常に良く、構築方法をうかがえる資料が得られている。出土遺物から推定される住居址の時期は8世紀中頃～9世紀中頃と11世紀～12世紀前半に集中している。掘立柱建物址は3間×2間と2間×1間が認められたが、時期は不明である。ピット112は火葬墓で、比較的新しい時期に属すると考えられる。

#### 遺 物

土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・磁器(白磁・青磁)・土製品(土錘・鞆の羽口・土製円盤)・鉄製品(刀子・鎌・鋤・釘・鉄鐮)・鉄滓・貨幣・石器(砥石・つき白)

これらの大半は住居址から出土したものである。特徴的な遺物としては、5軒の住居址から出土した青白磁、17住から出土した甲斐型杯、19住から出土した鉄鐮がある。

このほかに、検出面や遺構の覆土中から内耳土器・縄文土器・弥生土器・石器(打製石斧・スクレイパー)が出土している。

#### 成 果

今回の調査では、奈良時代中頃～平安時代後半にかけて継続した集落遺跡の一部を捉えることができた。住居址の分布状況から、調査地は集落の西端付近と推定されるが、遺跡の正確な範囲は明かにしえなかった。しかし、最近の周辺遺跡の発掘調査でも該期の集落遺跡が検出されているので、里山辺地区ではかなり広範囲にわたって古代集落が展開していたことが推定される。

## 第2節 遺 構

### 1. 住居址

#### 第1号住居址 (第5図)

西地区の南東、S 6～12・E 11～17に位置する。規模は5.6×4.8mで、長方形を呈する。検出面から床面までの高さが74cmあり、今回調査した住居の中ではいちばん深い。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは4個が検出されている。このうちP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は浅いが、位置的に柱穴の可能性がある。カマドは東壁のやや南寄りに位置し、煙道は52cmが認められる。煙道内部やカマドの西側に大形の被熱礫が散乱していることから、石組粘土カマドと考えられる。また、カマドの袖部周辺から覆土にかけて、構築用の粘土と考えられる黄灰色土ブロックが残存していた。遺物は土師器(甕・杯・椀)、須恵器(杯・甕)がある。特に、カマド内から土師器の甕、住居南東隅の床面で土師器の甕・杯、南壁周辺で土師器の椀(墨書)・杯、北東寄りでは土師器の杯(正位、完形)が出土している。なお、住居中央の床面直上で大量の河原石が認められた。住居廃絶直後の投棄と考えられる。本址の時期は平安時代前期(9世紀中頃)と推定される。

#### 第2号住居址 (第6図)

西地区の東端、S 6～9・E 18～19に位置する。調査区外にかかるため、住居の北西部がわずかに確認できただけである。規模・平面形、ピット、カマドの位置・構造等は不明である。床面は黄色土で、壁際より約50cm内側は堅くしまっている。遺物は少ないが、土師器(甕)・須恵器(杯)、鉄塊が出土している。本址の時期は平安時代初頭(8世紀末～9世紀前半)と推定される。

#### 第3号住居址 (第6図)

西地区の中央やや東寄り、S 1～5・E 7～12に位置する。4住・1土より古いのが、遺構が深い。ため、輪郭・床面をすべて捉えることができた。規模4.4×4.2mで、隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がるが、東壁では地山の黄色土を2段に整形しているのが認められた。床面は黄褐色土で堅くしまっている。ピットは2個が検出されている。カマドは西壁中央に位置し、煙道は66cmが認められる。カマド内に礫がないことから、粘土カマドと考えられる。遺物は土師器(甕・杯)、須恵器(蓋・杯)、つき白が出土している。特に、土師器の杯は完形でカマド付近の床面に正位で置かれていた。また、住居のやや西寄りの床面直上で15～40cm大の礫が40～50個出土している。住居廃絶直後の投棄と考えられる。本址の時期は奈良時代末～平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)と推定される。

#### 第4号住居址（第7図）

西地区の東側、NS0～S3・E12～17に位置する。3住より新、1土より古。規模は4.5×4.0mで、隅丸長方形を呈する。東壁際では3個の大形礫がかかっているが、これらは地山内の自然礫と考えられるものである。床面は暗黄褐色土で堅くしまっているが、壁際では堅さが認められない。ピットは3個が検出されているが、柱穴と考えられるものはない。カマドは西壁中央に位置している。奥壁寄りに礫3個が認められたが、袖石としては小さいので、粘土カマドと考えられる。遺物は床面から須恵器の杯が1点出土したほかは、覆土から土師器（甕）・須恵器（杯）が少量出土しただけである。本址の時期は平安時代初頭（8世紀末～9世紀前半）と推定される。

#### 第5号住居址（第6図）

西地区の南東端、S11～12・E16～18に位置する。調査区外にかかるため、住居の北西部がわずかに確認できただけである。規模・平面形、ピット、カマドの位置・構造等は不明である。床面は黄色土である。遺物は覆土から土師器（甕）・須恵器（杯）が少量出土しただけである。本址の時期は不明である。

#### 第6号住居址（第7図）

東地区の南東端、S5～9・E45～50に位置する。7住・8住より新。南西部と南東端が調査区外になるが、推定規模は5.3×4.2mで、不整長方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で、部分的に砂質であった。ピットは4個が検出されている。石組カマドは西壁中央に位置し、両側に袖石が1対残存していた。なお、カマド内で土師器の杯が出土している。遺物は床面から覆土中にかけて土師器（甕・杯・碗）、灰釉陶器（碗・段皿）、鉄製品（鎌・釘？）が出土している。また、覆土中には拳大～50cm大の礫が散乱していた。本址の時期は平安時代後半（11世紀前半～中頃）と推定される。

#### 第7号住居址（第7図）

東地区の南東隅、S4～5・E48～49に位置する。6住・8住より古。2軒の住居に大きく切られているため、住居の北東隅が確認できただけである。床面は礫混じりの黄色土である。遺物は検出面から土師器・灰釉陶器の破片が少量出土している。本址の時期は不明である。

#### 第8号住居址（第8図）

東地区の南東、S2～6・E43～48に位置する。7住より新、6住・9住より古。隣接する3軒の住居よりも床面が深いため、輪郭・床面をすべて捉えることができた。規模は5.0×4.2mで、隅丸長方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で非常に堅くしまっている。また、住居の南西隅から

南壁にかけて周溝が巡っている。ピットは4個が検出されている。このうちP<sub>1</sub>はカマドの脇に位置し、覆土に焼土・炭化物が混入していることから、カマドの灰捨て場と考えられる。他のピットは東壁に並ぶが、性格は不明である。石組カマドは北壁の東寄りに位置している。カマド付近の壁の立ち上がりは他に比べてゆるやかであるが、袖石を組む部分では壁面を急傾斜に整形している。カマドの遺存度は良好で、河原石を2重に配置した袖石と天井石の一部が認められた。遺物はカマドの東側から東壁にかけての床面で土師器の杯4点（正位・逆位各2点）と灰釉陶器の皿1点（正位）が出土している。このほかに覆土中から土師器（甕・杯・碗・盤）、灰釉陶器（碗・段皿）、釘、鉄滓、浮子が出土している。また、覆土は2層に分けられるが、上層では大形の河原石が多量に混入していた。これらの礫は表面に炭化物が付着しているものが多く、下層が堆積した後に人為的に投棄されたものと考えられる。本址の時期は平安時代後半（11世紀前半）と推定される。

#### 第9号住居址（第9図）

東地区の南東、NS0～S5・E38～44に位置する。8住・10住・11住より新、4土・5土より古。西・南壁の大部分が調査区外にかかっている。規模は4.9×4.9mで、隅丸方形を呈する。覆土は2層に分けられるが、下層は焼土と炭化物が多量に混じる暗褐色土である。そして、床面直上から建築材と推定される炭化材（最長23cm・幅5～8cm）が出土していることから、本址は焼失住居と考えられる。床面は礫が若干混じる黄色土で、堅くしまっている。ピットは7個が検出されているが、柱穴は特定できない。石組カマドは北東隅に位置している。8住同様にかマドの遺存度は良好で、築造時の石組をほぼ推定することができる。袖部は左右各3個の河原石を並べ、各々の手前側袖石の脇に大形河原石を立てて、袖部と住居の壁の間をふさいでいる。そして、この河原石一袖石一壁のなす空間には中形礫を裏込めしている。さらに、向かって左側では裏込め石の上に、偏平な大形河原石を蓋状にのせている。また、厚さ約3cmの板状の割り石を天井部の高架材として利用している。煙道は64cmが認められる。なお、カマド内から獣と推定される焼骨の破片が出土している。遺物は床面から土師器（柱状高台の盤）、土鏝、刀子、鉄滓が出土している。また、覆土中からは土師器（甕・杯）、灰釉陶器（碗・瓶）、緑釉陶器（碗）、白磁（碗）、鞆の羽口、鉄製品（鋸・釘）、鉄滓、つき白が出土している。なお、カマド周辺の床面から覆土にかけて多量の礫が出土している。これらの直下では炭化材が顕著に認められたことから、礫は住居の焼失直後に投棄された可能性が強い。本址の時期は平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）と推定される。

#### 第10号住居址（第9図）

東地区の南東、NS0～S1・E41～42に位置する。9住・11住より古。2軒の住居に大きく切られているため、わずかに北東隅が確認できただけである。床面は黄色土である。遺物は覆土から検出面にかけて須恵器と白磁（皿）が各1点出土しただけである。本址の時期は不明である。

#### 第11号住居址 (第10図)

東地区の南東、N1～S3・E37～41に位置する。10住より新、9住・5土より古。調査区外にかかるため、北・東壁の一部が確認できただけである。なお、本址は9住よりも床面が深いので、9住に切られた部分の床と壁をわずかに捉えることができた。規模は東壁4.4m、北壁3.6mが確認されただけで、方形または長方形を呈すると考えられる。床面は礫混じりの黄色土である。ピットは1個が検出されている。カマドは東壁中央に位置し、カマドの下部と考えられる焼土面が認められたが、構造は不明である。遺物は床面からの出土はなく、覆土中からわずかに土師器の破片(甕)が少量出土しただけである。本址の時期は不明である。

#### 第12号住居址 (第11図)

東地区の中央南端、N1～S7・E30～36に位置する。13住より古。住居の南側約半分は調査区外にかかる。規模は東西5.9m、南北4.6mが認められており、不整な方形または長方形を呈すると考えられる。床面は礫混じりの黄褐色土で堅くしまっている。また、床面の一部で炭化材が出土していることから、焼失住居と推定される。ピットは8個が検出されている。このうち、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>7</sub>は位置関係と深さからみて柱穴の可能性はある。カマドは不明である。遺物は床面から土師器(碗)、須恵器(甕)、灰釉陶器(皿)が出土している。覆土中からは土師器(甕・杯)・白磁が少量と、土製円盤、刀子、鉄滓が出土している。なお、壁際の床上10～20cmの覆土中に拳～人頭大の礫が出土しているが、住居の埋没過程で投棄された可能性がある。本址の時期は平安時代中頃(10世紀中頃)と推定される。

#### 第13号住居址 (第11図)

東地区の中央南端、N1～6・E31～35に位置する。12住より新、13土より古。住居の南側約半分は調査区外にかかる。規模は北壁4.5m、東壁4.1mが認められており、方形または長方形を呈すると考えられる。12住の覆土を床面としているが、壁際を除いた床面全体で炭化木材と植物質の炭化物が検出されている。また、その一部は覆土中にもブロック状に存在していた。これらのことから本址は焼失住居と考えられる。ピット・カマドは認められなかった。遺物は床面から覆土中にかけて土師器(甕・杯)、灰釉陶器(碗)、白磁(碗・皿)、鉄滓、つき臼が出土している。また、床面から覆土にかけて礫の混入が認められた。なお、北壁中央の大形礫は12住の埋没時に投棄されたか流入したもので、13住の建設時に大形礫を動かさずに掘り下げを行ったものと考えられる。本址の時期は平安時代後半(11世紀中頃～後半)と推定される。

#### 第14号住居址 (第10図)

東地区の中央東端、N5～11・E49～53に位置する。住居の南東隅がわずかに調査区外にかかっ



ている。規模は4.7×4.6mで、方形を呈する。黄色砂質土と砂礫からなる地山を床面としているが、検出面からの深さが3～10cmしかなく、貼り床等の可能性は不明である。ピットは2個が検出されている。カマドは東壁中央に位置している。袖石が認められないので、粘土カマドと考えられる。遺物は土師器(甕)、須恵器(杯・甕)が出土している。また、床面中央から北寄りにかけては河原石(～30cm大)が多量に出土している。本址の時期は奈良時代末～平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)と推定される。

#### 第15号住居址(第12図)

東地区の北東端、N19～22・E53～56に位置する。調査区外にかかるため、住居の南西部がわずかに確認できただけである。規模・平面形、カマドの位置・構造等は不明である。床面は地山の黄灰色砂礫に貼り床を施しており、黄褐色土で堅くしまっている。ピットは2個が検出されている。遺物は床面から灰釉陶器の段皿が出土している。また、覆土中から検出面にかけて土師器(甕)、輪の羽口の破片が出土している。本址の時期は平安時代後半(11世紀以降)と推定される。

#### 第16号住居址(第12図)

東地区の中央、N10～14・E35～38に位置する。規模は3.5×3.4mで、方形を呈する。床面は黄色土である。覆土は黄灰色土・黒褐色土ブロックが大量に混じっていることから、人為的な埋め土と考えられる。ピット・カマドは認められなかった。遺物は床面からの出土はなく、覆土中から土師器(甕)、灰釉陶器(碗)の破片がわずかに出土しただけである。また、床面直上には拳大～20cm大の礫約30個が散乱していた。本址は住居としては規模が小さいうえに、カマドがない点から、住居址ではなく堅穴状遺構の可能性も考えられる。本址の時期は不明である。

#### 第17号住居址(第13図)

東地区の中央北寄り、N22～28・E35～39に位置する。規模は5.0×4.7mで、やや不整な方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で、壁際周辺部以外は堅くしまっている。ピットは住居の東半部に集中して、5個が検出されている。このうち、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は浅いものの、位置的に柱穴の可能性がある。また、P<sub>3</sub>は底部から土師器(甕)の破片が出土したほか、焼土・炭化物・骨を多量に含む暗褐色土を覆土にもつことから、カマドに伴う灰捨て場と考えられる。石組粘土カマドは東壁中央に位置している。カマド上部の覆土には、構築用の粘土と考えられる黄灰色土ブロックが約1m×1mの範囲で多量に混入していた。カマド本体の遺存度は良好であった。カマドは大形河原石を2個1組で各袖に配置している(重機による検出作業時に奥寄りの袖石は北側に倒れてしまった)。また、中央には支柱石、北側の袖部には袖石を被覆していた粘土(黄灰色土)が良好に残っていた。カマド内では、底部中央から土師器の甕1個体分、さらに奥よりの底部から須恵器の杯破片が出土

している。床面の遺物は住居の北東部で須恵器（杯）、土師器（甲斐型杯）、砥石が、中央で鉄製品が出土している。覆土中からは土師器（甕・杯）、須恵器（蓋・杯・甕）が出土している。また、住居中央の床土約25cmの覆土中から15～35cm大の礫がまとまって出土している。住居の埋没過程で投棄されたものと考えられる。本址の時期は奈良時代後半（8世紀後半）と推定される。

#### 第18号住居址（第12図）

東地区の北西、N25～29・E25～29に位置する。15土より新、P75より古。規模は3.8×3.4mで、隅丸方形を呈する。床面は礫混じりの黄色～黄褐色土で堅くしまっている。ピットは4個が検出されており、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は柱穴の可能性がある。カマドは西壁中央に位置している。両袖には袖石が1個ずつ残存しており、内部からは土師器の甕が出土している。遺物はカマド周辺から多く出土している。カマドの東側の床面からは土師器の甕1個体分が、さらにその北側からは須恵器の大形甕の破片が出土している。覆土中からは土師器（甕）、須恵器（蓋・杯・甕）が出土している。また、住居中央の床面直上から大形河原石が数十個出土しており、住居廃絶直後の廃棄と考えられる。本址の時期は奈良時代中頃～後半（8世紀中頃～後半）と推定される。

#### 第19号住居址（第13図）

東地区の中央、N11～15・E30～33に位置する。P144より新、7土より古。規模は3.6×2.7mで、西辺に段差をもつ不整な長方形を呈する。床面は礫混じりの黄色土で堅くしまっている。ピットは北東隅に1個が検出されている。カマドは認められない。遺物は床面から鉄鐸が出土したほか、土師器（甕・杯）、灰釉陶器（椀）、青磁（椀）、釘が出土している。また、床面から覆土中にかけて多量の礫が出土している。本址は16住と同様の理由で、住居址ではなく竪穴状遺構の可能性が考えられる。本址の時期は平安時代後半（11世紀代）と推定される。

## 2. 建物址

#### 第1号建物址（第14図）

東地区の西寄りに位置する。3間×2間の側柱式で、5.2×4.0mの長方形を呈する。主軸方向はN-1°-Eである。柱間寸法は桁行1.6～1.9m、梁行1.6～2.2mである。柱穴は円形または楕円形を呈し、壁高は16～28cmと浅く、柱痕は認められない。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

#### 第2号建物址（第14図）

東地区の北西端に位置する。調査区外にかかるため、建物の南辺に該当する柱列が検出できただけである。確認できた部分は2間（以上）分、長さ4.0m、柱間寸法は2.0mである。主軸方向・

柱配りについては不明である。柱穴は円形を見し、壁高は32～50cmと深い、柱痕は認められない。遺物はP49から土師器(甕)の破片2点が出土しているだけで、本址の時期は不明である。

### 第3号建物址(第14図)

西地区の中央に位置する。2間×1間の側柱式で、規模3.2×1.7mの長方形を呈する。主軸方向はN-89°-Eである。柱間寸法は桁行1.2～1.9m、梁行1.7mである。柱穴は円形または楕円形を見し、壁高は8～18cmと浅く、柱痕は認められない。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

## 3. 溝址(第15図)

第1号溝址 東地区の北東、N22°E45～N16°E55に位置する。南東(高)―北西(低)、長さ11.6m、幅0.8～2.9m、深さ10～34cmが認められた。溝の幅が一定でなく、底面も凹凸があることから人為的な溝とは考えられない。遺物は土師器の甕が少量しただけで、本址の時期は不明である。

第2号溝址 西地区の北東、N2°E18～S1°E18に位置する。わずかに北(高)―南(低)で、長さ2.9m、幅0.5～1.2m、深さ5～16cmである。底面に大形の河原石が散乱している。幅が一定せず、不定形を呈することから、人為的な溝とは考えられない。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

## 4. 土坑・ピット(第16・17図)

今回の調査では土坑18基、ピット125基が確認されている。これらは本遺跡の集落構造・景観を考える上で重要な遺構である。しかし、調査期間が短かったため、十分な調査が実施できたのは土坑と、火葬墓・建物址を構成するピット(建物址の項で既述)だけである。この他のピットは平面測量と土層名の確認をただけで、土層図は作成していない。本書では、すべての土坑とピット112・120については一覧表と実測図を掲載しているので参照されたい。

以下、特徴的な遺構について述べることにする。

第1・4～7号土坑 1土が西地区の中央東寄り、4～7土は東地区の南に位置しており、比較的近接している。規模は直径1.6～2.2mで、平面形は円形または円に近い楕円形を呈している。このうち、5土では下層上面に鉄分の集積が認められた。これらは灰色系の覆土(暗灰色土・黄灰色土等)をもつ点で共通性が認められる。4・5・7土はいずれも平安時代後半の住居址より新しい切り合い関係にあるので、出土遺物からの時期特定はできなかったが中世遺構の可能性が考えられる。

第9号土坑 東地区の北西に位置する。規模は2.3×1.3mで、やや不整な長方形を呈する。検出面

からの深さは10cm前後と浅いが、炭化物を多量に混入する暗褐色土を覆土にもつことから、墓址の可能性はある。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

ピット112 東地区の北東に位置する火葬墓である。規模は95×82cmで、平面形は片側が突出する楕円形を呈する。覆土は上層が焼土・炭化物を混入する暗褐色土で、下層は灰色土をわずかに含む炭化物である。また、底面は厚さ2、3cmの炭化材が敷き詰められているような状況を呈していた。遺物の出土がないため、本址の時期は不明である。

ピット120 東地区の南東に位置する。規模は55×53×(深さ)33cmで、円形を呈する。底面から22cm上の覆土から弥生時代中期の土器(壺)破片が出土している。混入の可能性も考えられるので、ピットの時期については断定できないが、今回の調査で弥生時代の遺物が出土したのは本址だけである。

第1表 土坑・ピット一覧表

遺構No.	位置	平面形	長軸・短軸・深さ(cm)	新旧関係	出土遺物
1土	S1-E11	円形	156×148×24	3・4住より新	
2土	N8 E5	円形?	132×88×20		
3土	S9-FW0	不整形長方形	174×46×20		
4土	S5-E42	円形	156×94×14	9住より新	土師器
5土	S2-E41	楕円形	176×124×24	9住より新・P63より古	土師器・須恵器
6土	N2-E38	楕円形	222×184×28		土師器
7土	N12-E32	円形	156×154×30	19住より新	土師器・須恵器・灰輪陶器
8土	N24-E32	方形	128×124×28		土師器
9土	N26-E29	長方形	232×130×10		
10土	N29 E21	楕円形	164×132×20		
11土	S5-FW0	楕円形	184×84×16		
12土	S8-W1	楕円形	156×74×36		
13土	N3-E31	楕円形	124×60×18		
14土	N15-E47	不整形楕円形	296×110×38		鉄滓・土師器・須恵器・灰輪陶器
15土	N26-E24	不整形	334×228×26	18住・18土より古	土師器
16土	N17 E17	方形?	138×92×38	P101より新	
17土	N14-E20	円形?	144×60×14		
18土	N25-E23	楕円形	116×98×14		土師器
P112	N15-F48	楕円形	95×82×28		(火葬墓)
P120	N5-E40	円形	55×53×33		弥生土器

## 第3節 遺物

### 1. 縄文・弥生時代の遺物

今回の調査では、縄文・弥生時代に属する遺物が少量ではあるが出土している。弥生時代の土器を除けば、これらは遺構に伴うものではない。しかし、前回の調査や最近の鎌田・石上・堀の内遺跡の発掘調査では該期の遺構・遺物が検出されているので、本調査地の周辺にも遺構が存在する可能性は極めて高いといえよう。

#### (1) 土器 (第23図1~10・118)

縄文土器は平安時代の住居址内覆土と検出面から総計10点が出土している。なお、未報告ではあるが、前回調査においても、遺構に伴わない多量の縄文土器が出土している。

1~6は縄文時代前期末~中期初頭の深鉢の破片と考えられるものである。いずれも単節縄文が横位で施文されている。1~4はLR、5・6はRLである。7は中期末に属すると考えられる深鉢の口縁部である。1条の隆帯の下側に棒状工具で「C」字文を連続して刺突している。破片の末端には沈線文がわずかに認められる。

8~10は後期初頭、称名寺式に属すると考えられる深鉢の破片である。いずれも磨消縄文が施文されており、9・10は曲線区画である。

弥生土器はピット120の覆土から1点が出土している。118は弥生時代中期、栗林式に属すると考えられるものである。壺の胴部下半部で、篋描沈線で3本の大形の連弧文を施し、その上には縄文が施文されている。また、下側の無文部分にはケズリによる器面調整が施されている。

#### (2) 石器 (第25図1~3)

定形的な石器が3点、このほかに黒曜石の剥片・碎片14点(47.8g)が出土している。これらはすべて、後世の遺構の覆土に混入したものか、検出面からの出土である。文中の寸法は最大長×最大幅×最大厚(cm)、重量(g)であり、( )は破損している場合の現存値である。

打製石斧(1・2) 1は9住の覆土から出土したもので、頭~胴部を破損している。刃部は円刃を呈し、剥離面の一部に使用痕と考えられる摩耗痕が認められる。(5.19)×(4.65)×(1.10)cm、(3.2.90)g、千枚岩製。2は東地区の排土から採集された、短冊形を呈する完形品である。刃部は円刃で、使用痕と考えられる摩耗痕が認められる。8.55×4.18×1.89cm、85.30g、ホルンヘルス(粘板岩)製。

スクレイパー(3) 西地区の検出面から出土したもので、粗製・大形の完形品である。剥片の末端に、主要剥離面側から連続する剥離を施して外湾刃を作り出している。9.65×8.04×2.45cm、122.70g、硬砂岩製。

## 2. 古代以降の遺物

### (1) 土器・陶器 (第18～23図)

#### ア. 概観

針塚遺跡における土器・陶器の種類は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁に限られる。竪穴住居址から出土する土器は全体に量が少なく、それぞれの土器群の所属する時期を判別するのに困難な遺構が多かった。ここでは総数118点を図化・提示し、器種・器形の特徴とそれらの年代観を概観する。なお、本文中で使用する器種・器形の分類と、それら土器群の年代観については文献1・2によった。

#### イ. 各遺構出土の土器

##### 第1号住居址 (第18図1～10)

食膳具は、須恵器・黒色土器Aに限られる。須恵器は、有台の杯B(1)が出土している。形態は、体部の立ち上がりにきちんとした稜をもたず丸みをもって立ち上がる。底部には、回転糸切り痕が残る。黒色土器Aは、杯A(2～6)・碗(7)が出土している。4・6は、口径16.0～18.4cmと杯Aのなかでも大形である。煮炊具では、土師器甕B(9・10)と小形甕D(8)がある。いずれもカマド周辺から出土している。本址の時期は、7期に属すると考えられる。

##### 第2号住居址 (第18図11)

出土遺物が少ない。図示できる遺物は、須恵器杯A 1点(11)のみである。底部に回転糸切り痕がみられる。時期は、遺物が少ないため判然としないが、杯Aの形態から5～6期と推定される。

##### 第3号住居址 (第18図12～15)

食膳具は須恵器のみで構成される。杯A 3点(12～14)で、すべて底部に回転糸切り痕がみられる。12・13には墨書がある。煮炊具は土師器甕Bがみられる。本址の時期は、5期と考えられる。

##### 第4号住居址 (第18図16～18)

食膳具は須恵器が主体である。図示できたのは、杯A(16・17)、杯B(18)の3点である。杯Aは、底部に回転糸切り痕がある。16の腰部には、わずかにヘラ削りが施されている。杯Bの底部は、回転ヘラ削りされているが、中心部に回転糸切り痕が残されている。本址の時期は、出土遺物が少なく判然としないが5～6期と考えられる。

##### 第5号住居址

出土遺物が少ないため、土器様相を明らかにし得ない。時期は不明である。

##### 第6号住居址 (第19図19～25)

食膳具は、土師器・灰釉陶器・黒色土器Bで構成される。土師器は杯A 3点を図示している(19～21)。19は口径10.0cmと小型化した杯である。灰釉陶器は段皿(23)、碗(24)が出土している。双方ともに、底裏に回転ヘラ削りが施されている。灰釉陶器は、漬け掛けにより内外面に施釉されている。高台は、外面下半の稜が不明瞭で低い。黒色土器Bは、碗(22)が1点みられる。12～13期

の様相である。

#### 第7号住居址

出土遺物が少ないため、土器様相・時期は不明である。

#### 第8号住居址（第19・20図26～55）

食膳具で灰釉陶器・土師器・黒色土器A、煮炊具では土師器、貯蔵具でごく微量の須恵器が混じるといふ12期の様相を呈する。灰釉陶器は、碗（49～50）・段皿（45～47）・皿（44）を図化している。碗の特徴は、体部の腰の張りが強くなり、高台の外面下半の稜が不明瞭なものが多いことがあげられる。虎溪山1号窯式に比定されようか。土師器は杯（26～39）・碗（37）・盤B（52）・甕（54）・小形甕（53）と多くの器形がみられる。53の小形甕は、底部に高台状のものがあつた可能性がある。黒色土器Aは碗（40～42）がみられる。43の杯は混入品か。

#### 第9号住居址（第20図56～66）

食膳具は土師器・緑釉陶器・白磁、貯蔵形態では灰釉陶器が僅かにみられる。土師器は杯（56～60）、柱状高台の盤（61）を図化している。杯は、口径8.0～9.4cmと15.0cmの大小2つの法量が存在する。白磁は3点（64～66）出土している。いずれも器形は碗とみられる。64・66は器壁が厚く、口縁部に大きな玉縁をもつ。64の内面見込み部には、沈線状の段がみられる。IV類に分類できそうである。65は器壁が薄く、口縁に小さな玉縁をもつ。II類あるいはIII類か。緑釉陶器は、1点のみ出土している。内面見込み部には、ミガキ調整がみられる。本址出土土器群の時期は、14～15期と考えられる。

#### 第10号住居址（第20図67）

67は白磁の皿である。底部は、僅かに高台状のものを削り出している。内面には草花文を配している。VIII類に分類される。本址は出土遺物が少なく、図化し得たのは67の1点のみであるため時期・様相は不明である。

#### 第11号住居址

出土遺物が少ないため、時期・様相ともに不明である。

#### 第12号住居址（第20図68～72）

本址は出土遺物が少なく、5点を図化したのみである。灰釉陶器皿（70・71）、土師器杯（69）、黒色土器A碗（68）、白磁碗（72）で構成される。灰釉陶器は、70・71ともに濱け掛けされ、底部はへら削りされる。70は高台外面下半に稜を有する。68の黒色土器Aの碗は、内面見込み部に線刻がみられる。72の白磁碗は、低い削り出し高台を有する。軸は、底部に施軸されていない。IV類のものか。本址出土土器群は、10期と考えられる。

#### 第13号住居址（第21図73～78）

食膳具は灰釉陶器・土師器・白磁で構成されている。73の土師器杯Aは、小型化しており口径7.5cmを測る。74・75の灰釉陶器碗は、濱け掛けて高台が断面三角形の形態である。白磁は、76

が口縁部に小さい玉縁状の口縁をもつ椀である。IV類に分類されようか。77は椀底部の小片である。高台部は露胎しており、内面見込み部に施釉されている。78は皿である。体部はやや内彎し、その屈曲部の内面に弱い沈着状のものが巡っている。本址出土土器群の時期は、遺物が少ないため判然としないが13～14期と考えられる。

#### 第14号住居址 (第21図79～84)

食器の主体は須恵器である。杯A (79・80) は底部回転糸切りである。80の体部には墨書がある。81は体部の深い杯Bである。煮沸具は、82・83の土師器甕Bがある。84は古瀬戸系陶器の天目茶碗である。本址に伴うものではなく、混入品とみられる。本址は5期の土器様相を呈する。

#### 15号住居址 (第21図85・86)

遺物は少ない。85は灰釉陶器の段皿である。底部が厚くなりすぎて、不整形な形態をしている。施釉は、漬け掛けでなされている。86は黒色土器Bの椀である。内外面ともに明瞭なミガキがなされている。12期以降の土器様相と考えられる。

#### 第16号住居址

出土遺物が少なく詳細は不明である。

#### 第17号住居址 (第21・22図87～101)

食器は須恵器が主体である。杯Aは、底部回転糸切りのもの(90)と回転ヘラ切りのもの(89)が混在する。91は杯Bである。須恵器以外では、92の黒色土器A杯と93の土師器杯C(甲斐型)がある。93は内面中央から放射状に暗文状のヘラミガキが施される。底部および外面下半には、手持ちヘラ削りされる。煮沸形態は、土師器甕B(99・100)、甕C(97・98)、小形甕D(94・95)がある。貯蔵具は須恵器のみ(101)である。4期の土器様相である。

#### 第18号住居址 (第22図102～107)

食器は少ないが、煮沸具が多く出土している。食器は、須恵器杯B(102)が1点出土しているのみ。高台部は剝落している。底部は、回転ヘラ切りである。煮沸具は、甕C(106)、甕A(107)、小形甕B(103～105)が出土している。3～4期の土器様相と考えられる。

#### 第19号住居址 (第22図108～110)

出土遺物が少ない。108は土師器の小型化した杯である。110は灰釉陶器の椀である。底部は回転糸切りのちろクロナデ調整で、漬け掛けによって施釉される。109の須恵器杯Bは、混入品であろう。出土量がすくなく判然としないが、12～14期と考えられる。

#### ウ. その他の土器・陶磁器 (第22図111～117)

以上、記述してきた古代遺構のほか、包含層などから古代～中世の土器・陶磁器が出土している。須恵器杯A(114・116)、灰釉陶器小瓶(111)、鉢(112)、段皿(113)、白磁碗(115)、内耳鍋(117)を図化している。113の灰釉陶器段皿は、漬け掛け施釉され、底部に回転糸切り痕が残る。115の白磁碗は、玉縁状の口縁を有する。胎土は緻密であるが、黒い砂粒が混入する。117の内耳鍋以



外は、住居址等の時期と重なる遺物である。

#### エ. 針塚遺跡の土器様相について

針塚遺跡の古代土器は、大きく4～6期と12～14期の2つの時間幅で捉えられる。4～6期は、2・3・4・14・17・18号住居址などに見られる。この段階では、4期に比定される第17号住居址出土土器群が良好な資料である。食器具のなかで須恵器の割合が高い。杯Aは、回転糸切りと回転ヘラ切りが混在する。煮炊き具では壺Cが多い。12～15期では、6・8・9・13・15・19号住居址があげられる。この段階では、12期の第8号住居址出土土器群を除いて良好なセット関係を示す資料に恵まれない。総体的には、土器全体の中で食器具の割合が高く、土師器・灰釉陶器・輸入陶磁器で構成される。61はいわゆる柱状高台の土器である。従来、柱状高台または疑似高台と称されるこの形態の土器については、県内をはじめ東日本での検討がなされていた。県内では、岡田正彦氏により「小形高台杯形土器」として器種の提唱がなされ、鶴飼幸雄氏、坂本美夫氏らにより柱状高台土器として分類・編年が試みられてきた。さらに、鶴飼俊夫氏は、その分布が東日本だけでなく滋賀県・石川県・京都府等の西日本でも出土しており、時期的なものも11c末～12c代の範囲におさえられるとしている。これらのことから、原明芳氏が「足高高台」から「盤B」と器種を設定したのと同様に、「柱状高台」という部分名称的なものではなく、盤という一つの器種として捉える必要があろう。また系譜については、分布・年代観が盤Bとほぼ重なるため、盤Bの高台を簡略化したものとして位置づけられよう。

輸入陶磁器では、白磁・青磁がある。包含層出土遺物も含めて総破片数22点である。遺構単位では、13住が8点出土しており特殊性が窺える。

#### ＜引用文献＞

- 小平和夫 1990 「第3章 第5節 古代の土器」 『中央自動車道長野緑線埋蔵文化財発掘報告書4』  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」  
『九州歴史資料館研究論集4』

#### ＜参考文献＞

- 岡田正彦 1981 「平安時代以降の遺物」・「橋原遺跡における古代以降の様相」 『橋原』 岡谷市教育委員会
- 鶴飼幸雄 1983 「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」 『高部遺跡』 茅野市教育委員会
- 坂本美夫 1986 「柱状高台の皿・杯について」 『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』 神奈川考古同人会
- 鶴飼俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以降の土器様相」 『東国土器研究1』 東国土器研究会
- 原 明芳 1987 「信濃における食器の系譜—古代から中世へ—」 『文化財信濃』 14-3

## (2) 土製品 (第24図)

1は土鍾で、9住の床面直上からの出土である。全長42.2mm、最大径12.8mm、重量6.65gの完形品である。両端は直径8mm前後の平坦面をなし、孔は3.2~3.8mmの楕円形を呈している。2は籬の羽口で、9住から出土している。先端部の破片で、残存長48.6mm、最大厚さ22.0mmを計る。下端部の推定孔径は21mmである。籬の羽口については、この他に15住の検出面から小破片が出土している。3は12住の覆土から出土したもので、用途不明の土製円盤である。灰釉陶器の碗の破片を打ち欠いて、長径19.7mm、短径17.6mm、厚さ3.8mmの御弾(おはじき)状に仕上げている。

## (3) 金属製品 (第24図)

鉄製品19点と貨幣1点が出土している。このうち、図化可能な鉄製品17点と貨幣を掲載している。なお、文中の遺物を説明する数字は図番号と対応している。

刀子(1~4) 1は9住から出土。刃部の先端を破損しているが、残存長23.35cmの大形の刀子である。刃部は残存長15.35cm、最大幅2.69cmを計る。茎部は長8.0cmで、棟・刃側とも2段関を呈し、目釘穴(孔径0.2cm)を1つ有している。棟の厚さは刃部で0.41cm、茎部で0.37cmと厚めである。刃長が1尺未満なので刀子としたが、一般的な刀子とは異なり、短刀のな性格をもつものかもしれない。2は12住から出土。刃部が約1/2破損しているが、残存長13.28cmを計る。錆ぶくれが激しいが、刃部は最大幅1.94cm、棟の厚さ0.41cmと推定される。茎部は柄の木質部が良好に残存しているため、その形状は不明である。3は西地区の排土から採集したものである。刃部の一部から茎部にかけての部分で、残存長7.74cmを計る。刃部は刃側が失われているが、棟側は厚さ0.49cmあり、関が認められる。茎部は残存長5.63cmを計り、比較的大形の刀子と考えられる。4は9住から出土。両側を破損しているが、刀子の茎部と考えられる。

鎌(5) 6住から出土している。刃部が破損しているが、残存長10.63cm、最大幅3.58cmを計る。刃先を右にした場合、着柄するための茎部の折り返しが上を向くので、一般的な鎌とは逆になっている。

鏃(6・7) 9住から2点が出土している。6は片側を破損しているが、残存長6.17cm、高さ3.67cmを計る。中央部で厚さ1.40cmをかぞえるが、錆ぶくれが激しいため実際の厚さは不明である。7は完形品で、全長4.61cm、高さ2.06cmを計る。中央部は0.80×0.48cmの長方形断面を呈している。

釘(8~15) 8点が出土している。8は8住から出土。先端部を破損しているが、残存長3.59cm、幅0.67cm、厚さ0.59cmを計る。9~11は9住から出土。9は上半を破損しているが、残存長4.26cm、幅0.88cm、厚さ0.68cmを計る。10は中程で折れ曲がっているが推定長7.3cmで、頭部が0.95×0.74cmを計る完形品である。11は上半を破損しているが、残存長3.37cm、幅0.72cm、厚さ0.61cmを計る。12・13は19住から出土。12は同一個体と考えられる2破片からなるが、接合はしない。頭部側で幅0.70×厚さ0.91cmを計る。13は両端を破損しているが、残存長4.90cmを計る。錆ぶくれが激しく、

本来の幅・厚さは不明である。14はピット40から出土。両端を破損しており、残存長2.07cm、幅0.64cm、厚さ0.50cmを計る。15は東地区の検出面から出土。先端を破損しているが、残存長4.16cmを計る。頭部は折り返されており、幅0.96cm、厚さ1.24cmを計る。この他に図示していないが、6住から釘または鉄の茎部と考えられるもの（残存長2.15cm、径0.38cm・両端破損）が出土している。鉄鐸（16） 19住の床面から完形品が出土している。鉄板を筒状に折り合わせたもので、全長5.81cmを計る。幅は下側にむかって徐々に大きくなり、下端部で長径1.56cm、短径1.53cmを計る。鐸を吊り下げるための孔については、銷落しの段階で注意したが認められなかった。

不明鉄製品（17） 17住から、両端を破損しているが、残存長3.98cm、幅0.50cm、厚さ0.46cmを計る棒状の鉄製品が出土している。幅・厚さがほぼ一定であることから、釘や鐸の茎部とは考えられないので不明鉄製品としておく。この他に図示していないが、8住から残存長2.36cm、径1.14cmの棒状を呈するものが出土しているが、破損状況・器種等は不明である。

鉄塊・鉄滓 鉄製品のほかに、鉄塊・鉄滓が出土している。鉄塊は2住から2.84×2.63cmの拇指状を呈するものが出土している。鉄滓は12点(265.89g)が出土し、その内訳は8住・9住・14住から各2点、12住から1点、13住から5点である。大きさは小指大のものから最大6.27×5.78cm(106.94g)までとさまざまである。また、13住の鉄滓には木質部が付着しているものが認められた。これらについては、9住から鞆の羽口が出土しているので、本調査地の周辺で鍛冶が行われていた可能性が考えられよう。

貨幣（18） 9住の覆土から後世の混入品と考えられる永楽通寶（初鑄1408年）が出土している。周縁をわずかに欠いているが、残存径24.55mm、重量1.80gを計る。

#### （4）石器（第25・26図）

総計7点が出土し、すべてを図示している。なお、文中の寸法は最大長×最大幅×最大厚(cm)、重量(g)であり、( )は破損している場合の現存値である。

砥石（1・2） 砂岩製の砥石が2点出土している。1は17住の床面から出土したもので、直方体を呈する完形品である。長側辺4面に砥面があり、うち1面は特に使い込まれている。25.5×5.7×4.3cm、1200g。2は西地区の検出面から出土したもので、片側辺を破損している。1面に砥面をもつ大形品である。38.2×(15.4)×10.5cm、(8600)g。

つき白（3～6） 4点出土している。いずれも石材として多孔質の安山岩を利用して、礫の中央部にくぼみ（凹部）が設けられている。3は3住から出土した完形品である。凹部が小さく、縄文時代の凹石に近い形状を呈している。12.4×9.8×5.5cm、890g。4は9住から出土した完形品である。凹部が不定形を呈するが、摩耗した平滑面を有している。12.7×10.7×8.3cm、1500g。5は13住から出土した完形品である。凹部は摩耗した平滑面を有している。さらに、底部中央には本体を安定させるために打ち欠いた痕跡が認められる。15.3×13.3×9.7cm、2250g。6は東地区の

排土から採集したもので、片側辺～底部にかけて破損している。凹部は摩耗せずに、敲打痕をよく残している。11.0×9.3×(6.4) cm、(710) g。

浮子(7) 8住から浮岩(軽石)製の浮子2点が出土している。いずれも不定形な塊状を呈するが、風化・摩耗が激しいため、破損状況や紐掛け等の痕跡は観察できない。図示した7は1面に研磨された平滑面が認められる。6.17×5.03×4.30cm、40.04 g。他の1点は9.98×6.48×5.02cm、79.15 gを計る。

## 第4章 調査のまとめ

今回は発掘面積1476㎡と小範囲の調査ではあったが、奈良・平安時代の古代集落の一端を捉えることができた。最後に、今回の発掘成果と課題・問題点等を挙げてまとめたい。

### 1. 遺跡の範囲

針塚遺跡は縄文～平安時代にかけての複合遺跡（遺物散布地）として知られている。今回の調査地は針塚遺跡の北縁に位置している。針塚遺跡の周辺には荒町・兎川寺・薄町・石上・鎌田・堀の内遺跡等が認められる（第3図）。このうち、荒町・兎川寺遺跡を除く4遺跡は発掘調査が実施されて、縄文時代前期～中・近世にかけての遺構・遺物が確認されている。各遺跡は近接しており、遺構の時期も重複するものがある。各遺跡の正確な範囲・内容が捉えられていない現在、個々の遺跡を独立したものとして、里山辺地区の歴史を考えることは危険である。現在の遺跡名は小字名をとって名付けられているため、本来同じ遺跡であっても、別の遺跡として捉えられることがある。今回の調査地は、針塚遺跡と兎川寺遺跡の間にあり、薄町遺跡にも近接しているので、どの名称で呼ばれても差し支えない地点に位置している。上記のことから、今回は針塚遺跡として報告しているが、遺跡の呼称と範囲については、周辺遺跡も含めて今後の検討課題としておきたい。

### 2. 遺跡の時期

弥生時代 針塚遺跡は1982年の第1次調査で、弥生時代前期末の再葬墓が検出されている。しかし、今回の調査地は前回発掘地点よりも北側約300mに位置するため、発掘にあたっては再葬墓と同時期の集落関係の遺構の検出が期待された。しかし、調査の結果は、ピット120の覆土から弥生時代中期の土器破片が出土しただけであった。また、遺跡内にある針塚古墳の1989・90年の調査でも弥生時代の遺構・遺物は見つかっていない。わずか3地点の調査ではあるが、再葬墓の範囲は前回調査地点を中心にごく狭い範囲に限られていると推定される。被葬者の生前の集落については、今後の発掘調査に期待したい。

平安時代 今回検出された住居址の時期は、奈良時代中頃～平安時代後半に属するものである。しかし、出土土器からの所見によれば、これらは継続して営まれたものではなく、8世紀中頃～9世紀中頃と11世紀～12世紀前半に集中している。特に、前者の時期については次に掲げる平安時代の2つの文献の記載との関係で重要であるので、そのことについて簡単にふれたい。

ア、『日本後紀』延暦18年（799）12月「十二月甲戌、又信濃國人外従六位下封妻眞老・（略）・等言、己等先高麗人也、小治田、飛鳥二朝庭時節、帰化来朝、自爾以還、累世平民、未改本号、伏望依去天平勝寶九歳四月四日勅、改大姓者、賜眞老等姓須々岐、（略）」

イ、『日本三代実録』十四 貞観9年（867）3月「三月十一日辛亥、信濃國（略）、正六位上梓水神、須々岐水神並従五位下、（略）」

アは7世紀前半に高句麗から帰化した先祖をもつ封妻眞老が改姓を朝廷に願い出て「須々岐」姓

を賜った記事であり、イは867年に正六位上の須々岐水神が従五位下に位が昇叙した記事である。この記事は8世紀末から9世紀の後半の出来事であり、いずれの「須々岐」についても現在の薄町・薄川の「すすぎ」に通じるものと解釈されている。そして、アの須々岐姓を賜った集団の居住地として現在の薄町周辺、イの須々岐水神を祭った神社として須々岐水神社（今回調査地の約420m東側）が考えられている。そして、イについては、梓水神と須々岐水神が神階が昇叙した背景として「用水路により拓かれた地域の有力な人々の叙位奏請によるもの（『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻 歴史上』 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973）」と考えられている。今回の調査地は須々岐水神社に近接し、住居址の時期はこの2件の出来事に重複している。発掘調査では文献の記載を裏付けるような遺構・遺物は見つかっていないし、文献と考古学の成果を短絡的に結び付けることは危険でもある。しかし、里山辺地区の奈良・平安時代を考えていく上で薄町周辺の遺跡は重要な鍵を握っていると考えられよう。なお、針塚遺跡では9世紀後半から10世紀代にかけて集落は希薄になる。しかし、薄町・石上遺跡で9世紀後半から10世紀前半の住居址が見つかったので、集落が移動した可能性が考えられよう。また、11・12世紀の住居址は薄町・石上・堀の内遺跡から見つかっており、この時期は広範囲に集落が展開していた可能性が考えられる。

### 3. 遺構・遺物

遺構については、8・9・17住のカマドが特筆される。いずれも遺存状況が良く、カマドの構築状況がうかがえる資料が提示できた。カマドの位置や構造の変遷については既に論じられているので（『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』長野県埋蔵文化財センター 1990）、今後はカマドの変遷が意味する上部構造の変化や住居の「場」を追求していくことが課題と考えられる。

遺物については、平安時代後半の住居址から出土した磁器がある。特に、白磁については9住から5個体、13住から9個体の破片が出土している。すべて破片であるので、厳密に言えば住居の廃絶時以降の混入の可能性もあるが、他にやきものが出土するような遺構は認められないので、（窰穴式）住居で使用されていたと考えられる。周辺の堀の内遺跡でも白磁が出土しているが、今後は住居址の性格や輸入陶磁器そのものの検討が課題である。

### 4. 結語

里山辺地区での県営ほ場整備事業に伴う発掘調査はこの報告書をもって完了する。各遺跡の発掘調査では、それぞれが多大な成果をあげることができた。これらは里山辺地区はもちろんのこと、松本平の原始・古代を解明していく上で欠かすことのできない資料と言えよう。今後の課題は発掘の成果を歴史的に位置づけ、ふるさとの歴史文化財として活用して行くことにある。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までの間、多くの方々からご理解、ご協力を賜りました。記して感謝の意を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対してより一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

第2表 住居址一覧表

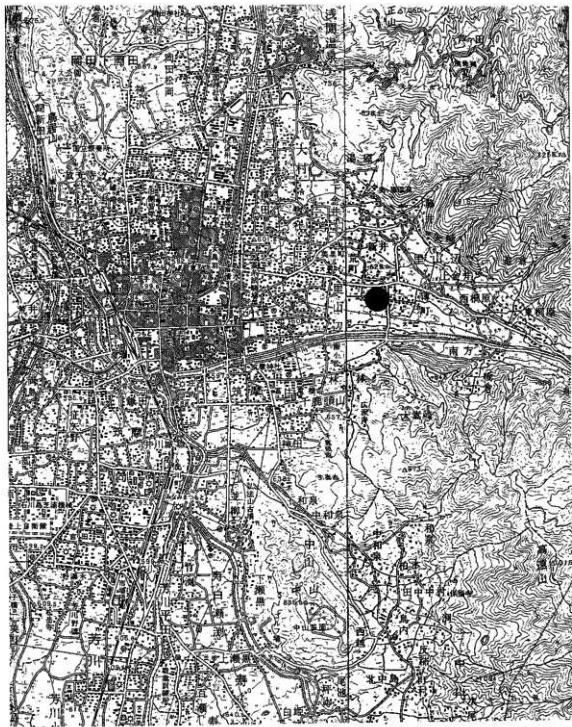
床面積の( )は推定面積

住居 No.	図 No.	平面形	屋 構		主軸方向	カマド形態			新 旧 関 係	備 考
			長軸・短軸・深さ(cm)	床面積(m <sup>2</sup> )		種類	位置	煙道(cm)		
1	5	長方形	560×480×74	23.3	N-86°-E	石組 粘土	東壁南寄り	52		
2	6		324×140×60	3.8						
3	#	隅丸方形	444×416×32	13.3 (14.2)	N-97.5°-W	粘土?	西壁中央	66	4住・1土より古	
4	7	隅丸長方形	448×400×36	14.5	N-90°-W	粘土	西壁中央		3住より新 1土より古	
5	6		132×44×44	0.5						
6	7	不整形長方形	528×424×22	15.7 (19.4)	N-90°-W	石組	西壁北寄り		7・8住より新	
7	#		66×44×18	0.1					6・8住より古	
8	8	隅丸長方形	500×420×44	15.0	N-0°-E	石組	北壁東寄り		7住より新 6・9住より古	浮子
9	9	隅丸方形	494×488×36	15.6 (22.4)	N-2°-W	石組	北壁南	64	8・10・11住より新 4・5土より古	焼失住居 白磁・土壁
10	#		120×56×20	0.4					9・11住より古	白磁
11	10		440×360×32	8.3	N-85°-E		東壁中央		10住より新 9住・5土より古	
12	11	不整形方形?	588×464×32	17.5	N-0°-E				13住より古	焼失住居 白磁
13	#	方形?	448×412×48	19.4	N-0°-E				13住より新 13土より古	焼失住居 白磁
14	10	方形	466×460×14	19.4 (19.5)	N-82°-E	粘土	東壁中央			
15	12		348×312×36	9.7						
16	#	方形	352×336×28	8.2	N-15°-W					
17	13	方形	498×466×40	18.6	N-86.5°-E	石組 粘土	東壁中央			早更型 礎石
18	12	隅丸方形	376×344×32	10.7	N-90°-W	石組	西壁中央		15土より新 PVSより古	
19	13	不整形長方形	360×268×24	5.3	N-0°-E				7土より古	古礎・鉄礎

第3表 建物址一覽表

遺構 No.	平面形 柱配り	主軸方向 面積(m <sup>2</sup> )	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm)				柱 穴 平面形	柱 穴 備 考	建 物 址 所 在
					No.	長径	短径	深さ			
1	長方形 圓柱式	N-1'-E 21.1	3間×2間 5.2×4.0	桁1.6~1.9 梁1.6~2.2	52	64	60	28	円形		
					53	46	40	16	楕円形		
					54	42	40	20	円形		
					55	56	42	16	楕円形		
					56	56	44	28	楕円形		
					57	52	42	26	楕円形		
					58	58	45	18	楕円形		
					59	56	44	22	楕円形		
					60	58	58	18	円形		
					61	48	44	22	楕円形		
					2			×2間 ×4.0	美 2.0	49	
50	74	68	50	円形							
51	46		32	円形							
3	長方形 圓柱式	N-40'-E 5.1	2間×1間 3.2×1.7	桁1.2~1.9 梁 1.7	23	48	44	14	円形		
					24	52	40	8	楕円形		
					25	50	44	18	楕円形		
					26	46	38	16	楕円形		
					27	36	36	10	円形		
					28	34	34	8	円形		



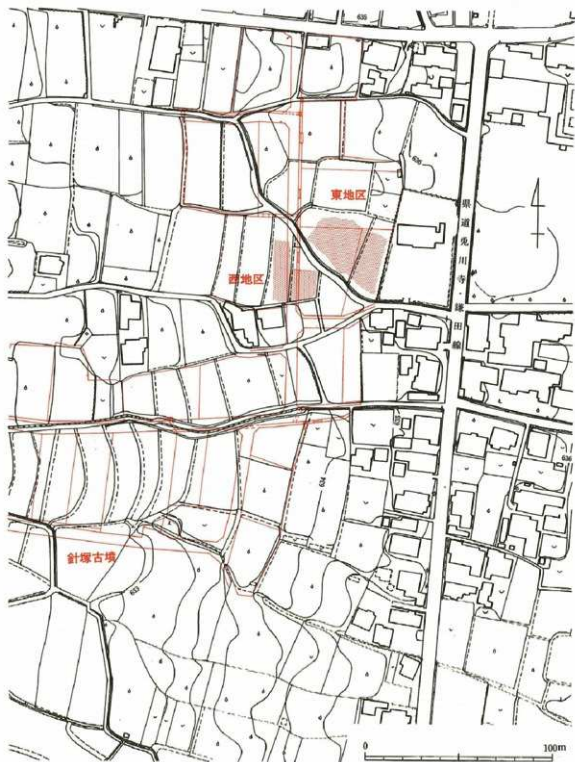


1:50,000

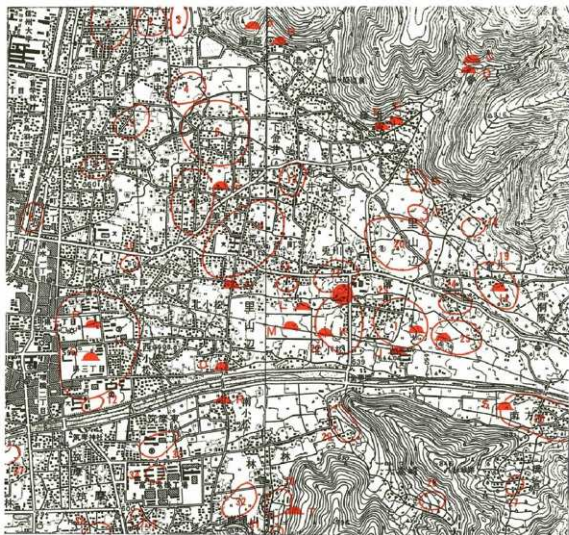
● 調査地



第1図 遺跡の位置



第 2 図 調査範囲



● 調査地

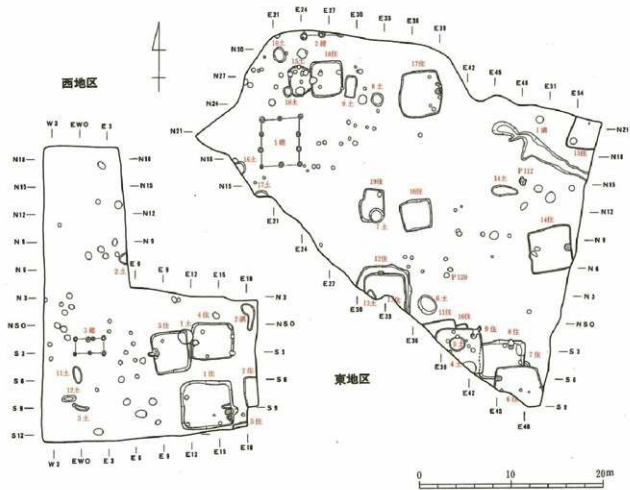
●遺跡

1. 大輔原
2. 立石
3. 前田
4. 塚田
5. 横田
6. 惣社北
7. 古屋敷
8. 女鳥羽川
9. 宮北
10. 四ッ谷
11. 泉町
12. 埋橋
13. 新井
14. 下原
15. 荒町
16. 山田
17. 藤井
18. 矢崎
19. 上金井
20. 畑の内
21. 兔川寺
22. 針塚
23. 薄町
24. 鎌田
25. 石上
26. 南方

●古墳

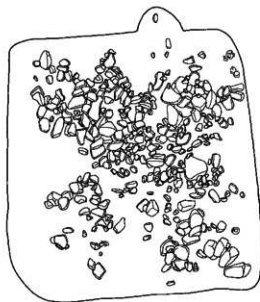
- |           |          |
|-----------|----------|
| A. 御母家第2号 | K. 針塚    |
| B. 御母家第1号 | L. 大塚第2号 |
| C. 山田入    | M. 大塚第1号 |
| D. 丸山     | N. 荒町    |
| E. 藤井第1号  | O. 北河原屋敷 |
| F. 藤井第2号  | P. 泉塚第2号 |
| G. 車塚     | Q. 泉塚第1号 |
| H. 上金井    | R. 巾上    |
| I. 古宮     | S. 南方    |
| J. 猫塚     | T. 御符    |

第3図 周辺遺跡

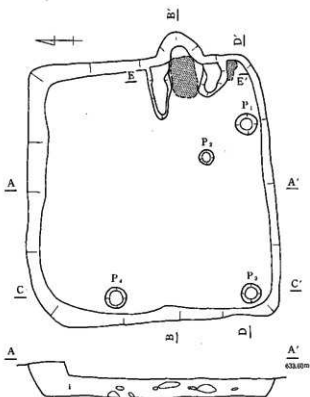


第4图 全体图

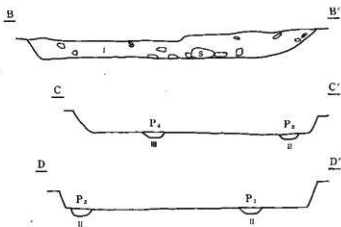
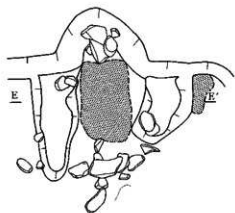
出土状態



完備状態



カマド

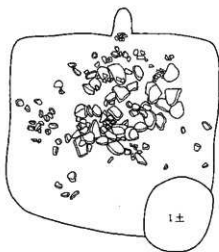


I : 暗褐色土 (灰化跡残存・黄色土層混入)  
 カマド付近は、炭化物・灰土の量が多い  
 II : 暗黒褐色土  
 III : 暗褐色土 (黄色土層混入)



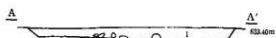
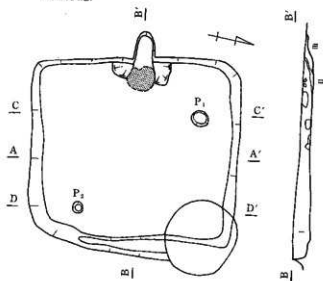
第5図 第1号住居址

第3号住居址  
出土状态

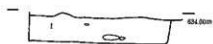
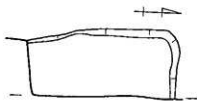


I: 暗褐色土 (灰化物混入・黄色土層混入)  
II: 暗土 (灰化物混入)  
III: 暗褐色土 (黄色土層混入)

完備狀態



第2号住居址



I: 暗褐色土 (黄色土層混入)

第5号住居址

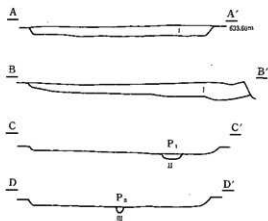
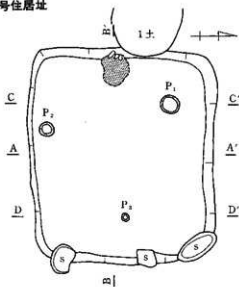


I: 暗褐色土 (灰化物混入)



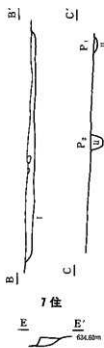
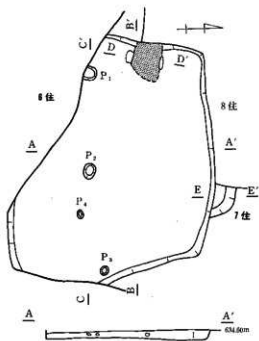
第6图 第2・3・5号住居址

第4号住居址

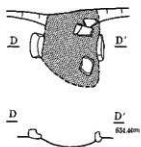


I : 暗褐色土 (炭化物散見・黄色土塊散入)  
 II : 暗褐色土 (黄色土塊散入)  
 III : 暗褐色土

第6・7号住居址



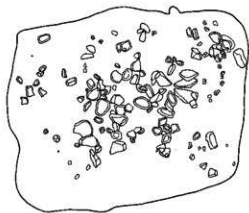
6住カマド



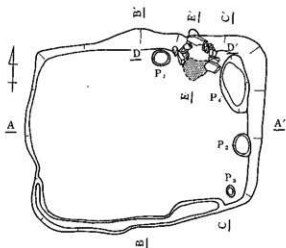
I : 暗褐色土 (炭化物散見・厚~30cm大塊散入)  
 II : 暗褐色土 (炭化物散入)  
 III : 暗褐色土 (黄色土塊散入) 7住層七

第7図 第4・6・7号住居址

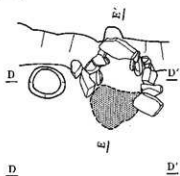
出土状態



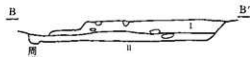
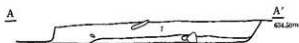
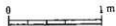
完掘状態



カマド



- I : 暗褐色土 (炭化物・燻炭)
- II : 暗褐色土 (焼土・炭化物混入)
- III : 暗灰色土 (焼土・炭化物多量混入)
- IV : 暗黄褐色土 (灰土・炭化物混入)



- I : 暗黄褐色土 (灰土・燻炭)
- II : 暗褐色土 (炭化物混入)
- III : 暗褐色土 (炭化物少量混入)
- IV : 暗黄褐色土 (上層のみ灰土・炭化物混入)

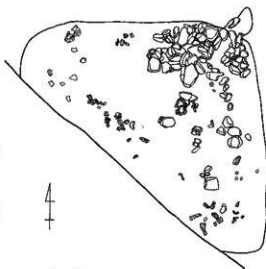
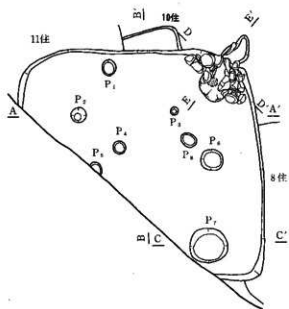


第 8 図 第 8 号住居址

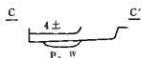
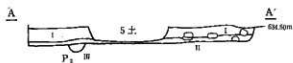


完掘状態

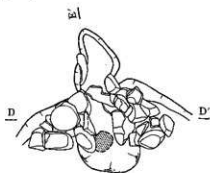
第9号住居址  
出土状態



カマド



- I : 暗褐色土 (炭化物無量混入)
- II : 暗褐色土 (炭土混入・炭化物少量混入)
- III : 暗褐色土 (炭化物・黄色土混入)
- IV : 暗褐色土 (炭化物混入)
- V : 暗褐色土 (炭化物混入・黄色土混入) 10住底土

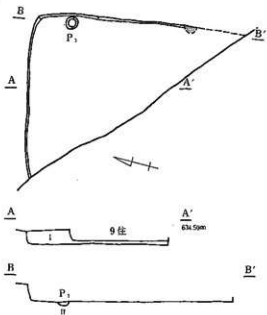


- I : 暗褐色土 (炭化物混入)
- II : 暗褐色土 (炭化物・黄色土混入)
- III : 暗褐色土 (炭化物・黄土混入)
- IV : 暗褐色土 (炭化物・黄土無量混入)



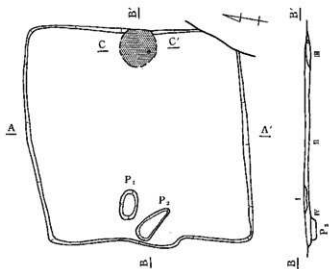
第9図 第9・10号住居址

第11号住居址

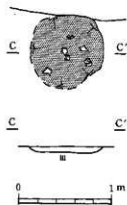


I : 粘赤褐色土  
II : 暗褐色土

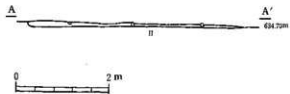
第14号住居址



カマド

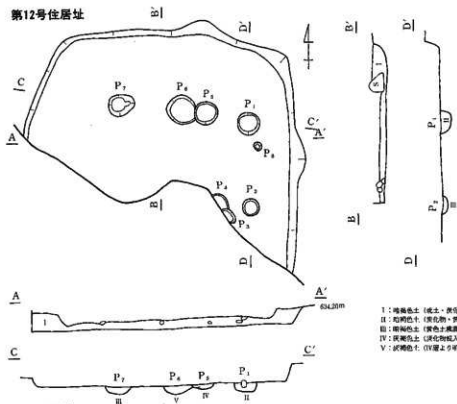


I : 黄灰色土 (磁器)  
II : 粘赤褐色土 (磁器入)  
III : 粘赤褐色土 (粘土器入)  
IV : 暗褐色土

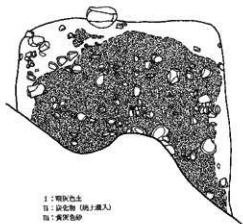


第10図 第11・14号住居址

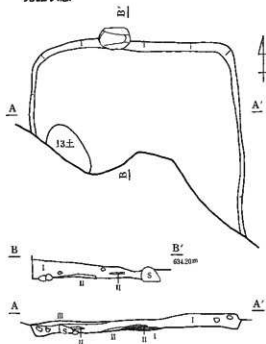
第12号住居址



第13号住居址  
出土状態

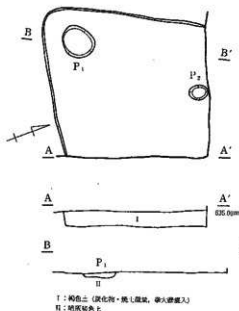


完掘状態

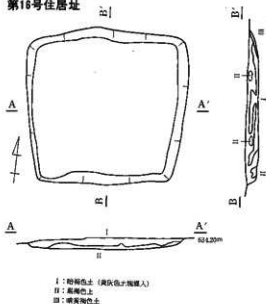


第11图 第12・13号住居址

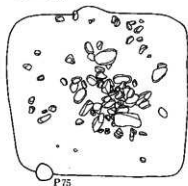
第15号住居址



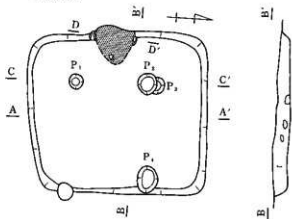
第16号住居址



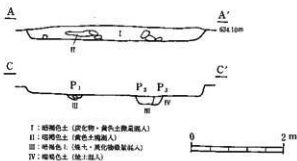
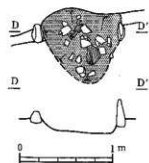
第18号住居址  
出土状態



完掘状態

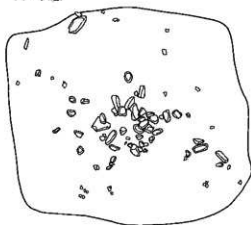


カマド



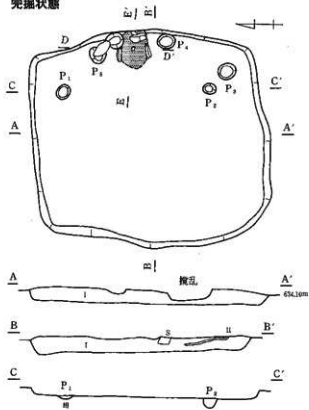
第12図 第15・16・18号住居址

第17号住居址  
出土状態

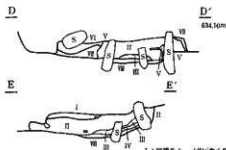
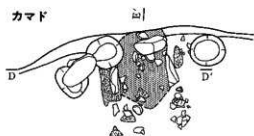


- I: 砂褐色土 (黄灰色土層混入)
- II: 黄灰色土 (黄褐色土層混入)
- III: 黄褐色土

発掘状態



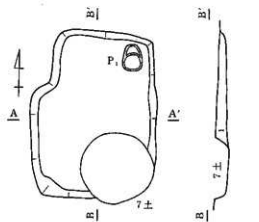
カマド



- I: 砂褐色土 (黄灰色土層・炭化物層混入)
- II: 黄褐色土 (黄灰色土層少量混入)
- III: 黄褐色土 (粘土混入)
- IV: 黄褐色土 (炭化物混入)
- V: 黄灰色土 (キヤップ層等に貼ったもの)
- VI: 黄灰色土 (黄褐色土混入)
- VII: 黄褐色土
- VIII: 粘土 (炭化物混入)



第19号住居址

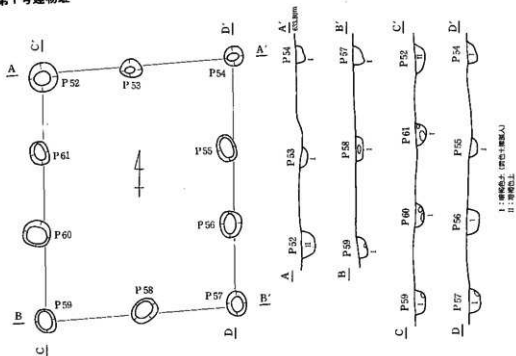


- I: 黄褐色土 (炭化物混入)

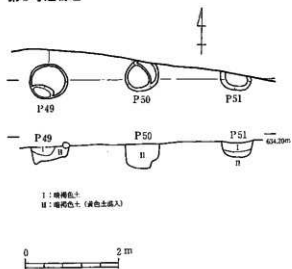


第13图 第17・19号住居址

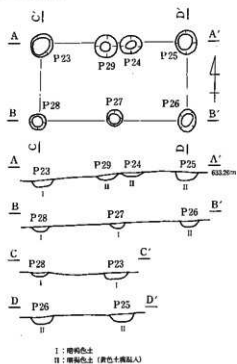
### 第1号建物址



### 第2号建物址

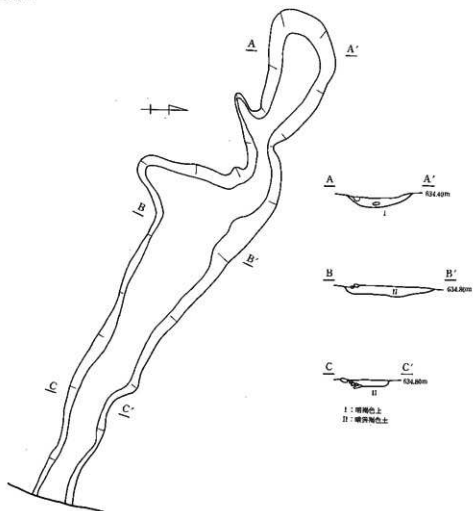


### 第3号建物址

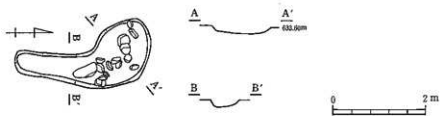


第14图 第1・2・3号建物址

第1号沟址

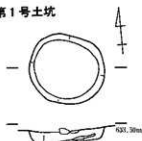


第2号沟址



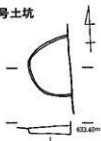
第15图 第1·2号沟址

第1号土坑



I: 暗灰色土 (炭化物微量混入)  
II: 灰色砂

第2号土坑



I: 暗褐色土 (黄色土混入)

第3号土坑



I: 暗褐色土 (炭化物微量・黄色土混入)

第4号土坑



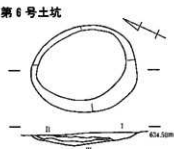
I: 黄灰色土 (粘质)  
II: 灰色砂 (炭化物微量混入)

第5号土坑



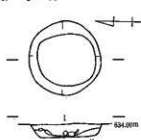
I: 灰色砂 (炭化物混入)  
II: 灰白色砂 (I层2分隙密交砂, 上面に数分骨状)

第6号土坑



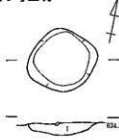
I: 暗灰色土 (砂混入)  
II: 灰色土 (粘质)  
III: 暗黄灰色土 (粘质)

第7号土坑



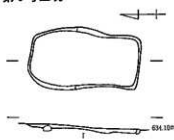
I: 暗灰色土 (炭化物混入, 粘质)  
II: 灰色土 (粘质)

第8号土坑



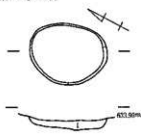
I: 暗褐色土 (炭化物微量・黄大粒混入)

第9号土坑

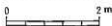


I: 暗褐色土 (炭化物多量混入)

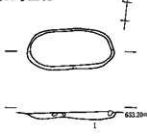
第10号土坑



I: 暗褐色土 (黄色土混入)

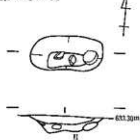


第11号土坑



I: 暗褐色土 (黄色土混入)

第12号土坑

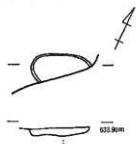


I: 暗褐色土  
II: 暗褐色土 (φ20cm大粒混入)

第16图 土坑(1)

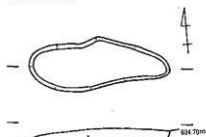


第13号土坑



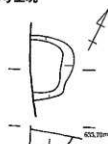
I : 灰色土 (灰化物少量混入, 削皮)

第14号土坑



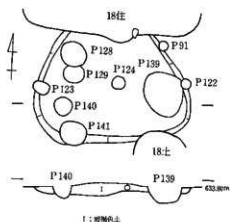
I : 暗褐色土 (灰化物混入)

第16号土坑



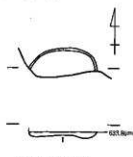
I : 暗褐色土 (黄灰色土塊混入)

第15号土坑



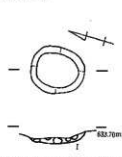
I : 暗褐色土

第17号土坑



I : 灰色土 (灰化物混入)

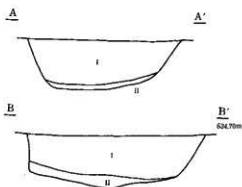
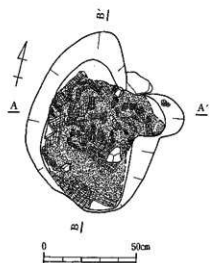
第18号土坑



I : 暗褐色土 (黄色土・灰化物・糠・黄土混入)



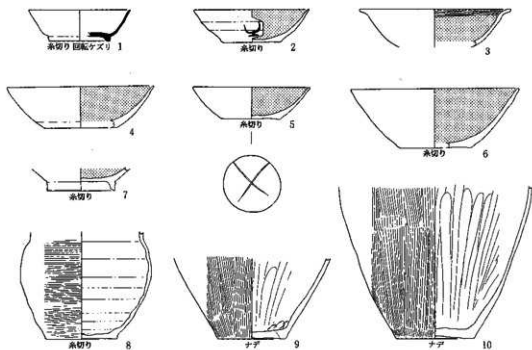
ビット112(火葬墓)



I : 暗褐色土 (焼土・灰化物混入)  
II : 灰化物 (灰色土少量混入)

第17図 土坑(2)・ビット

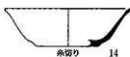
第1号住居址



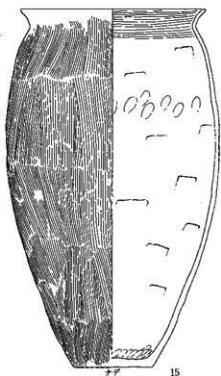
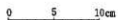
第2号住居址



第3号住居址

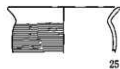


第4号住居址

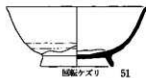
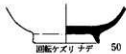
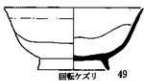
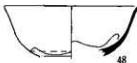
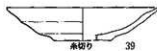
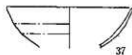
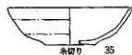


第18図 土器(1)

第6号住居址

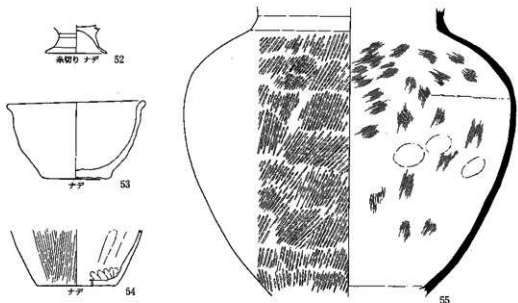


第8号住居址

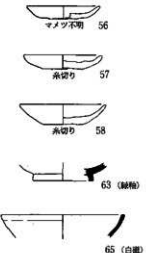


0 5 10 cm

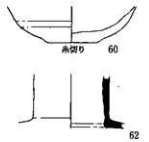
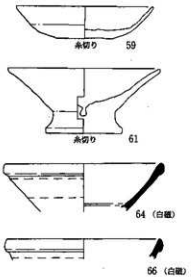
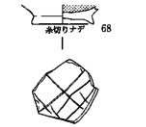
第19図 土器(2)



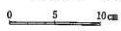
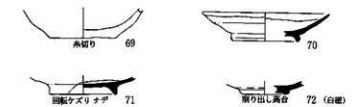
第9号住居址



第12号住居址

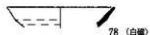
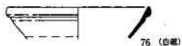


第10号住居址

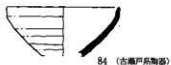
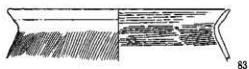
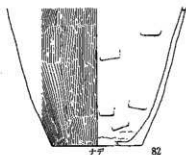
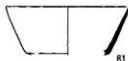


第20図 土器(3)

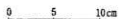
第13号住居址



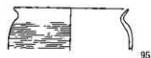
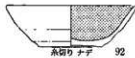
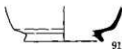
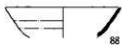
第14号住居址



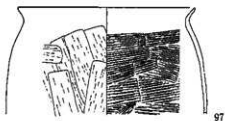
第15号住居址



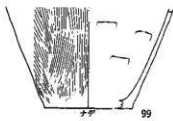
第17号住居址



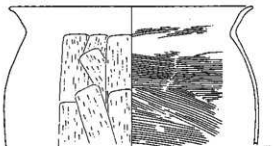
第21図 土器(4)



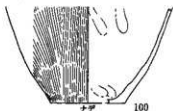
97



99



98



100



101

第18号住居址



102



103



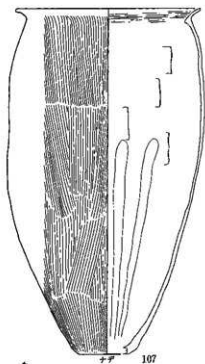
104



105



106



107

第19号住居址



糸切り 108



糸切り 回転ケズリ 109



糸切りナデ 110

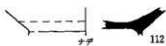
0 5 10 cm

第22図 土器(5)

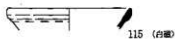
検出面



111



112



115 (白磁)

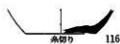


113



114

排土



116

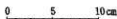


117

ビット120



118



縄文土器拓影



1



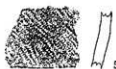
2



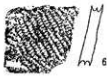
3



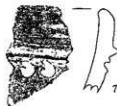
4



5



6



7



8



9

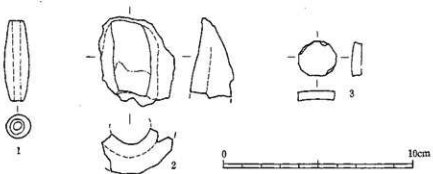


10

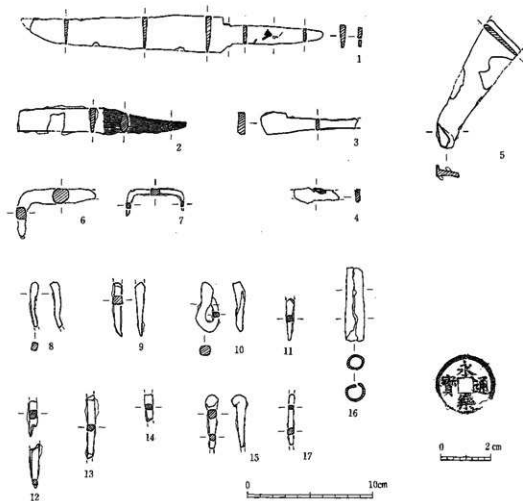


第23図 土器(6)

土製品



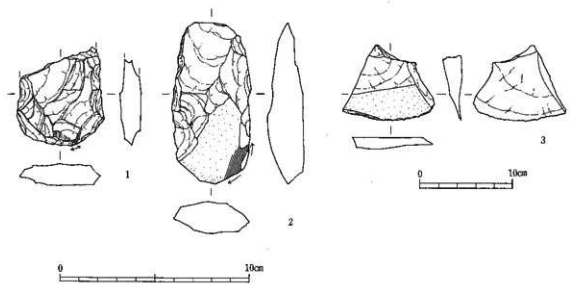
金属製品



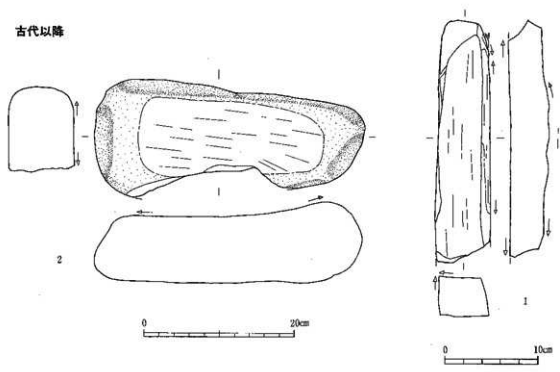
第24图 土製品・金属製品



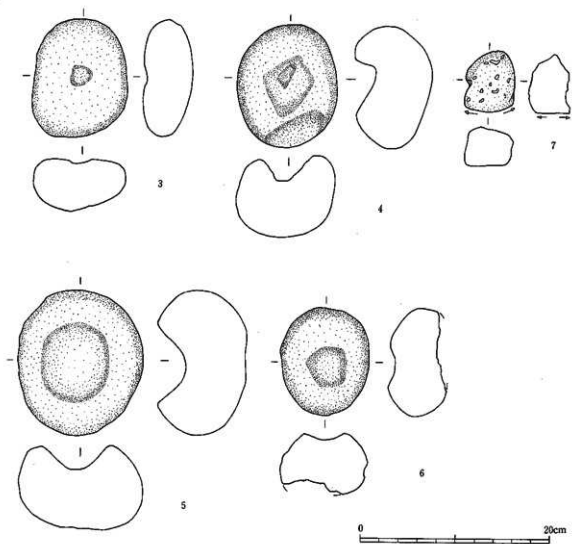
縄文・弥生時代



古代以降



第25図 石器(1)



第26圖 石器(2)

# 写 真 图 版



調査地遠景

右側の白い建物は金井医院。  
中央の段差がある部分の手前が西地区、奥は東地区。



基本土層(西地区)

中央やや右寄りに、ピットが観察できる。  
検出面までは礫を混じえない良質の土壌である。



東地区(検出面)

北西から撮影。左側のコンクリート擁壁の上は金井  
医院。



東地区(検出面)

北から撮影。左側は第18号住居、右側は第1号建物  
址。



東地区(完掘)

北西から撮影。



東地区(完掘)

北東から撮影。住居址は手前が第17号住居、奥が18号  
住居。さらに、その左右に第1・2号建物址が見える。



西地区(完掘)

西から撮影。手前に第3号建物址、奥に第1・3・4号住居址が見える。



西地区(完掘)

北から撮影。手前は第3号建物址。



第1号住居址(出土状況)

住居中央に大形礫が散乱している。住居席絶直後に投棄されたものか。



左同(完掘)



第2号住居址



第5号住居址



第3号住居址(出土状況)

住居の奥(西)寄りでは、床面直上に大形礫が散乱している。手前には第1号土坑、第4号住居址が見える。



左同(完掘)



第4号住居址(出土状況)

東壁際にある3個の大形礫は地山内の自然礫と考えられる。



左同(完掘)



第6号住居址(出土状況)

覆土中には拳大～50cm大の礫が散乱している。遺物の出土量は少ない。



左同(完掘)

西(右)壁中央にカマドの袖石が1対残存しているのが見える。(北から撮影)



### 第6号住居址(完掘)

検出面から床面までは浅いが、カマドの袖石は残存していた。(東から撮影)



### 第8号住居址(出土状況)

覆土は2層に分けられる。上層には大形礫が散乱している。礫には炭化物が付着しているものが多い。



### 第8号住居址(出土状況)

遺物は住居の東側(手前)に集中している。



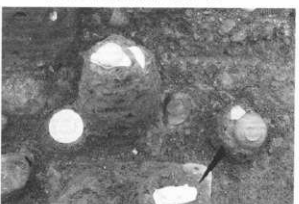
### 左同(完掘)

本址は9住(左側)と6住(右側)に切られている。そのため平面形は不整な長方形を呈する。



### 第8号住居址(遺物出土)

住居の南東部。手前に灰軸陶器の碗、右上に逆位の土師器の杯が見える。



### 左同(遺物出土)

住居の東壁際。床面から土師器の杯2点(逆位)と灰軸陶器の皿1点(正位)が出土している。



第8号住居址(カマド)

カマドは北壁の中央からはずれて、東寄りに構築されている。



左同(カマド)

カマドの遺存度はよく、天井部の高架材も奥寄りの一部が残っていた。



第8号住居址(カマド)

袖の部分は河原石を2重に配している。



左同(カマド)

完掘状況。



第9号住居址(完掘)

西から撮影。



第9・10・11号住居址

南から撮影。左から、第11・10・9号住居址となる。  
9住のカマドは北東隅に築造されている。





第9号住居址(カマド)

カマドは住居のコーナーを巧みに利用し、平面が三角形を呈するように造られている。



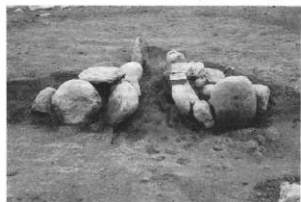
左同(カマド)

カマドの構築材は、袖部に比較的扁平な大形河原石を使用し、天井部には板状の石材を使用している。



第9号住居址(カマド完掘)

袖石は左右各3個。袖と住居の壁の空間は裏込め石でふさいで、その上に大形河原石で蓋をしている。



左同(カマド完掘)

手前に大形河原石を立てて、垂直な面を構成している。



第10・11号住居址(完掘)

左が11住、右が10住である。いずれも9住に切られており遺物の出土量は少ない。



第11号住居址(完掘)

11住は9住よりも床面が深いので、東壁を捉えることができた。カマドの痕跡が認められる。



第12号住居址(出土状況)

住居の中央部が13住に切られているため、遺物や礫は壁際に集中している。



左同(完掘)

北から撮影。



第13号住居址(完掘)

本址は焼失住居で、壁際を除く床面全体に炭化材が検出されている。



第15号住居址(完掘)

検出面から床面までの深さが浅く、不整形方形を呈している。地山が砂礫なので貼り床が施されている。



第14号住居址(出土状況)

住居の中央から北(左)寄りにかけての床面に、河原石が散乱している。遺物は少ない。



左同(完掘)

カマドは東壁中央に造られている。西から撮影。



第16号住居址(出土状況)

床面直上で拳大~20cm大の礫が散乱している。  
遺物は覆土中から土師器と灰軸陶器が少量出土。



左同(完掘)

ピット・カマドは認められないので、竪穴状遺構の可能性はある。



第17号住居址(完掘)

礫混じりの黄色土を床面にしている。  
カマドは東壁中央に位置している。



左同(遺物出土)

住居の北東隅。手前に甲斐壺杯、奥に砥石が見える。



第17号住居址(カマド)

カマドの上部には構築用粘土と考えられる黄灰色土  
ブロックが見られる。



左同(カマド)

カマドの内部と周辺からは土師器の壺が出土している。



第17号住居址(カマド完掘)

左右の袖は各々2個の袖石からなる。奥寄りの袖石は、いずれも左側に倒れてしまっている。



左同(カマド完掘)

カマドの遺存度は良好で、支柱石も残っていた。



第18号住居址(出土状況)

住居中央の床面直上から大形河原石が出土している。遺物はカマドの周辺に多く認められた。



左同(完掘)

カマドは西壁中央に位置し、両袖に1個ずつ袖石が残存していた。写真中央に柱穴2基が見られる。



第18号住居址(カマド)

比較的小形の河原石を袖石として利用している。カマド内部からは土師器の壺が出土している。



第19号住居址・第7号土坑

いずれも床面から覆土にかけて多量の礫が出土している。第19号住居址からは鉄鐸が出土している。



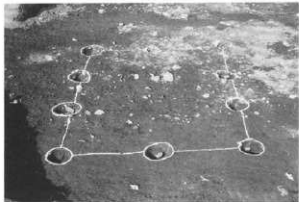
第19号住居址



第1号土坑



ピット112(火葬墓)



第1号建物址



第1号溝址



第2号建物址



第3号建物址



2



6



5



5



8



9



12



13



10



19



21



22



28



29



30



32



33



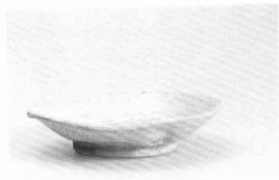
34



38



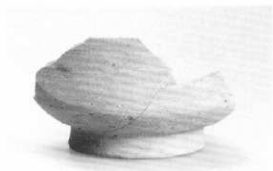
39



46



47



49



51





53



55



56



57



58



61



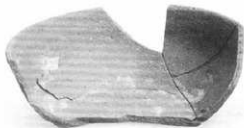
68



90



93



93



85



108



101



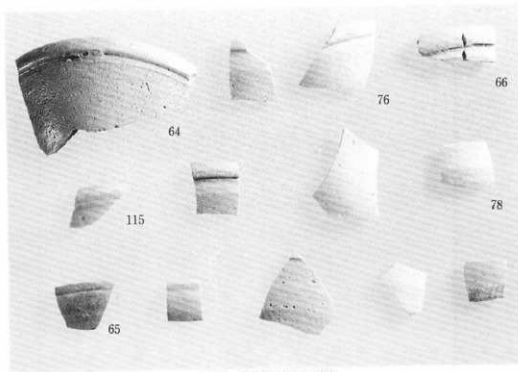
114



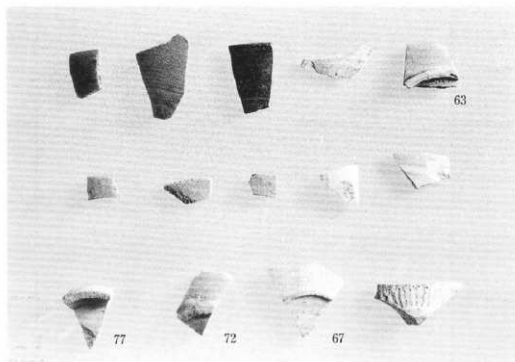
107



94



輸入陶磁器(白磁)



緑釉陶器・輸入陶磁器(青磁・白磁)



刀子(1)



刀子(2・3)



鎌(5)



釘(8~10)



鋇(6・7)



鉄鐸(16)



貨幣(18)



土錘(1)



韃の羽口(2)



土製円盤(3)



打製石斧(1・2)



スクレイパー(3)



つき臼(3)



つき臼(4)



つき臼(6)



つき臼(5)



浮子(7)



砥石(1)



砥石(2)

---

---

松本市文化財調査報告 No.102

## 松本市針塚遺跡Ⅱ

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集 松本市教育委員会  
〒390 長野県松本市丸の内3-7  
TEL0263 (34) 3000

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社

---

---

